翻　訳

ケーテ・コルヴィッツ『日記』「序文」— 試訳

Einführung zu : Käthe Kollwitz, Die Tagebücher, 1908-1943.
hrsg. v. Jutta Bohnke-Kollwitz. Berlin 1989.

稲　福　日出夫

訳者まえがき：

以下に訳出を試みたのは、Käthe Kollwitz: Die Tagebücher, 1908-1943. hrsg. v. Jutta Bohnke-Kollwitz. Berlin 1989. 所収の Einführung, ss. 7-34. である。

このケーテ・コルヴィッツ『日記』の編者で、冒頭「序文」の執筆者であるユッタ・ボーンケ-コルヴィッツについて、『日記』の表紙裏にある簡単な編者紹介文によって記しておく。

ユッタ・ボーンケは、ケーテ・コルヴィッツの双子の孫（イェルディス Jördis とユッタ Jutta）のひとりである。1923年５月23日の生まれ。ケーテの長男ハンスの娘である。彼女はゲルマン学の研究者で学位も授与されている。1960年から、ドイツのユダヤ民族史のためのケルン図書館、ゲルマニア・ユーダイカ（Germania Judaica）の設立に携わった。1984年から1990年まで、ケルンにあるケーテ・コルヴィッツ美術館の館長を務めた。なお、以下の試訳脚注はすべてユッタによる原注である。

ここで、この『日記』を35年にわたって刻み込んでいた画家・版画家のケーテ・コルヴィッツの略歴に触れておく。

ケーテは、1867年７月８日、東プロイセンのケーニヒスベルクで生まれた。ケーテの父親カール・シュミットは、大学で法律学を修めたが、国家の官吏として仕える裁判官職を放棄して、石工のマイスターとなった。妻カタリーナとの間に７人の子供がいた。ケーテの一番上の二人の兄姉は、幼児期に死亡、成人していったのは、兄コンラート、姉ユーリエ、そして、五番目の子ケーテ、３歳年下でケーテともっとも親しかった妹リースベト（リーゼ）の４人である。さらに８歳年下の弟ベンヤ

ミンが誕生したが、１歳で亡くなった。

ケーテの母方の祖父、ユーリウス・ルップは、大学で神学や歴史、哲学を専攻し、大学教授資格を取得した人物であった。彼は、従来の教会のあり方に批判的で、結局、聖職を追われ、無給講師として長年続けていた大学での講義も断念せざるを得なかった。1846年、ケーニヒスベルクでドイツにおける最初の自由教団（freie Gemeinde）を設立する。それは「自由への自己教育に捧げられた聖なる教団として、隣人愛にみちた家族共同体的な組織であった」（志真斗美恵、後掲書、13頁）という。ルップは「ケーテの育った家庭の精神的な支柱」（同書）であり、また「幼いケーテにとっては尊敬すべき、しかし畏怖すべき人物でもあった」（西山千恵子「生涯とその社会的背景」若桑みどり『ケーテ・コルヴィッツ』、彩樹社、1993年、所収、136頁）。ルップには６人の子供がいた。その第一子、長女が、ケーテの母親カタリーナである。ケーテが17歳の頃、祖父が亡くなると、カタリーナの夫、つまり、ケーテの父親カールがその仕事を引き継ぐことになる。

カールはケーテの幼い頃から、娘が画家になることを期待した。「残念なことに私は女の子であった。が、それでも父は、私に人生の活路をそれに賭けたいと思った。私が可愛らしい女の子ではなかったので、その道を歩む途上、恋愛ごと（Liebessachen）などで妨げられることもあるまい、との思いもあったのである」（Käthe Kollwitz, Erinnerungen, in Die Tagebücher, ss. 725, 726.）。

1985年、ケーテは、ベルリンの女子美術学校に入学する。翌年、ケーニヒスベルクに戻り、兄コンラートの親友で、当時医学生であったカール・コルヴィッツと婚約する。が、それを「父は、ひどく失望し、憤慨した」（ebd.）。父親カールは、ケーテが画家として自立していく上で、その妨げになるのではないかと憂慮したのであった。88年、ミュンヘンの女子美術学校へ入学。２年間、そこで学ぶ。

1891年６月、24歳のケーテは、カールと結婚し、ベルリンの北部、労働者街のヴァイセンブルガー通りに住む。夫の診察室も兼ねていた。ケーテは、1943年８月、戦火を免れるためベルリンから離れるまで、その地に住み続けた。1892年５月、長男ハンス誕生。96年２月、次男ペーター誕生。1914年10月、ペーター、ベルギーで戦死。20年12月、長男ハンス、オッティーリエと結婚。21年７月、ケーテにとって初孫のペーター誕生。23年５月、双子の孫イェルディスとユッタ誕生。40年７月、夫

カール死去。42年９月、孫のペーター、ロシアで戦死。43年11月、爆撃でベルリンのケーテの住宅は全焼。1945年４月22日、ケーテは疎開先のドレスデン近郊のモーリッツブルクで、この『日記』の編者である孫のユッタの世話を受けながら生涯を終えた。享年77歳。

ケーテは、第一次世界大戦で次男ペーターを、第二次世界大戦で孫ペーターを、失った。まだ、18歳、21歳の青年であった。

夫カールとともにベルリン北部の貧民街で暮らし続け、そこで感受した社会制度の矛盾を告発し、子供を戦争に差しだす母親の絶望（たとえば、木版画「犠牲」）を描いたケーテの作品について、若桑みどりは「彼女の芸術は、世界史上はじめての、わが子を戦争で死なせた母親の記録である。かつて女性は芸術家にはならなかった。女は黙って子供を育て、黙って子供を殺されていたのだ。女は沈黙の子宮であった」と述べる。さらに続けて「だが、論理は逆転する」。消費財として使用されるために新たな生命を誕生させることはまっぴらである。「それは野蛮で、割りに合わない仕事だ。女たちは子供を産むことを拒否するであろう。どこの世界にこんな割りに合わない馬鹿な徒労をやるものがいるだろうか。避妊の知識が普及したいま、子供が殺されるかもしれないこの世界に子供を産み出す愚行をするかしこい女はいない」。そして、人間の尊厳を踏みにじられた深い哀しみ、ケーテが芸術行為で示した意思は「なにも過去になっていない」と指摘する（若桑みどり、前掲書、126-127頁）。

同時に、私は、ユッタによるこの「序文」、ケーテの評伝を読んで、彼女のなかに、或る意味で、さらに人間的な側面を感じた。また、当時にあって、二人の子をもうけながら、画業の道を突き進み、社会に発言し続けることができたのは、もちろん夫カールと志操を共有したことも不可欠であったが、同時にまた、長年にわたってコルヴィッツ一家とともに過ごした家政婦レーナの献身的な支えによるところも大きいだろう、との思いをもった。

ケーテ・コルヴィッツを主題にした単行本として、若桑みどりの前掲書のほか、清眞人・高坂純子『ケーテ・コルヴィッツ — 死・愛・共苦』（御茶の水書房、2005年）がある。また、鈴木東民訳『ケーテ・コルヴィッツの日記 — 種子を粉にひくな — 』（アートダイジェスト、2003年）には、ケーテの日記や手紙の抄訳、

また、「思い出」「過ぎ去りし時代への回顧」の邦訳も収録されていて貴重である。なお、日本におけるケーテ・コルヴィッツ受容史については、志真斗美恵の後掲書の「エピローグ　励まし ― 日本の人びとに ― 」（285頁以下）に詳しく紹介されている。

私は、10年ほど前のベルリンでの在外研究期間中、慣れない異国暮らしに疲れを覚えたとき、時折、クーダムにあるケーテ・コルヴィッツ美術館に足を運んだ。そこは賑やかな大通りから少し脇に入っただけなのに、何故か閑静な空間であった。美術館の一角にある喫茶店で、手に入れたパンフレットを眺めていたりした。そして、部屋に戻っては沖縄から持参した本を再読し、あれこれ思いを巡らせていた。「いかなる彫像も、いつかは海に呑みこまれる。作者は去り、作品も消える。（作品がブロンズの像であっても、社会制度であっても、それは同じことだ。）しかしそのとき、そこで、私の世界は早春の海とジャコメッティの像とから成りたっていたのだ。繰返し打寄せる波、巨大な拡り、自然。その自然を見、理解し、愛するものの一回性が、凝って化したブロンズの形。ジャコメッティの作品は、その生涯の証言である。しかし同時に人間に固有なもの（本質的なもの）の証言でもある。彼の生涯が、他の誰の生涯ともちがっていたのではない。誰の生涯にとっても本質的なものに、徹底的に相対し、本質的なものにのみ係りあいながら生きる勇気が彼にだけあったということだ」（加藤周一『稱心獨語』、新潮社、1972年、85-86頁）。

ケーテが1909年11月30日に記した『日記』にも、そうした志向と交差する記述がみられる。「私は作品を制作するにあたって、現在いくぶん主題が拡散しているものを、絶えず圧縮し簡略化した形で保有することに心がけなければならない、と気付いた。これから取り掛かる新たなエッチングは、本質的なものだけを強調し、非本質的なものはすべて否定する内容にしたい、と思う」（Die Tagebücher, s. 62.）。

「天命をまっとうすることができずに迎える不条理な死 ― 戦争、テロル、あるいは飢餓による死。残された人びとの悲しみを思うとき、ケーテ・コルヴィッツの作品がわたしの脳裏に浮かぶ」と書き出し、「小女時代から晩年に至るまで100点あまりにのぼる自画像は、彼女が自己を凝視するなかから創作する作家であった証でもある」と記される『ケーテ・コルヴィッツの肖像』（績文堂出版、2006年）の著者、志真斗美恵によるギャラリー・トークを、私は、2010年２月11日、佐喜眞美術

館で聴いた。数十名の参加者が先生を囲むかたちで行われたその会で、先生はあらかじめ配布されたケーテの略年譜を基に、終始穏やかな口調でもって、不条理なものごとに対峙するケーテの意思、その生涯を貫く志を、彼女の自画像の変容と絡めながら語りかけた。講演会の終了後、先生のその御本をおそるおそる差し出すと、快くそれに「Nie wieder Krieg！」と書き入れて下さった（ふたたび戦争を繰り返すな、もう戦争はいらない！の意）。

2008年７月25日の『琉球新報』には特集「美を見る」の頁一面に、「死んだ子を抱く母」のエッチングと、「ピエタ」のブロンズ像が大きく写し出されている。その紙面で、学生時代に読んだ魯迅の文章からケーテ・コルヴィッツの名を知ったという佐喜眞美術館の佐喜眞道夫館長は、その後、銀座の画廊でケーテの版画「死んだ子を抱く母」と出会ったときの衝撃を、こう綴っている。「私は言葉を失ってしまった。母親が死んだ息子を全身で抱きしめているその絵のあまりの激しさに、最初は、動物が子供を喰っているのか、と思った。よく見てみると、激しい哀しみのあまり、母親の顎は息子の胸に喰いこんでいる。これほどの激しい哀しみと深い愛情表現を私は見たことがなかった」。

また、「コルヴィッツの作品を集めた佐喜眞美術館の収集の思想」を、重ねてさらに、それらの作品群に「沖縄で出会い直す意味」を追思考する仲里効は、今年１月20日から３月８日まで開かれた「ケーテ・コルヴィッツ展」を「展評」する文章を、「そこに立つとき、見る者は哀しみを哀しむ能力を己の中に見いだすだろう」と結んだ（『琉球新報』2010年２月５日）。

北京の魯迅博物館の孫郁館長が３月に初来県し、佐喜眞美術館所蔵のケーテ作品の展示会を、早ければ来春にでも北京で開催する計画がある、との新聞報道があった（『琉球新報』３月７日、『沖縄タイムス』３月17日）。インタビュー記事「コルヴィッツと魯迅」のなかで、「ドイツではなく沖縄の佐喜眞美術館コレクションを使って展覧会を開くことの意義」を問われた孫館長は次のように答えている。「沖縄の佐喜眞美術館で集められたコルヴィッツ作品を北京で展示することで、東アジアの近現代史を見直し、反省し、歴史の記憶を掘り起こす大きなきっかけになる。沖縄は戦争や平和、民族アイデンティティーの問題などが、大変複雑に交差している。その沖縄が所有するコルヴィッツ作品を通して、こうした複雑さを象徴的に、

隠喩的に表現することができる」（『琉球新報』3月23日）。

一連のこうした記事に心を動かされて、10年前に購入した『日記』を改めて手にし、クーダムにあるケーテ美術館、その中庭や喫茶店の空気を想い起こしていた。そして、この夏、もとより美術史の知識が皆無であることを承知しつつも、ユッタの「序文」だけでも試みに訳出してみたいという思いに駆られた。

佐喜眞美術館を運営している佐喜眞道夫・加代子館長ご夫妻、学芸員の上間かな恵さんをはじめスタッフのもとへ、日頃の地道な活動に感謝の意を込めて届けたいという念で、この拙い訳文を綴っていた。また、兼藤正一郎、礼さん、今年(2010年) 7月12日新たにその家族の一員となった漣ちゃん一家のもとへも。

ケーテ・コルヴィッツ『日記』「序文」

先日、古い日記を読み始めた。戦前にまで遡って読んだ。私はしだいに憂鬱な気分になっていった。おそらく、これまでの人生のなかで、ためらいを感じることがあったりうっ憤がたまったときに、そうした思いを書き綴っていたということによるのだろう。物事がすべて順調に運んだときに日記に向かうということはめったに無かった。ハンス [Hans Kollwitz, 1892-1971, ケーテの長男 - 訳注] の心が落ち着いている場合には、日記に記すとしても、わずか数行のメモ書き程度であり、逆に、ハンスが心の平静さを失った場合には、数ページにわたって書き綴っている。また、カール [Karl Kollwitz, 1863-1940, ケーテの夫 - 訳注] と私が、互いに睦まじく幸福感にひたっているときには、とりたてて書き記されているものは何もない。が、気持ちがすれ違っている場合には、何ページにもわたって書き記している。そういった点からすれば、日記というものは真実の半分しか伝えてない。私は、日記を読み返しながら、そう感じた。なるほど、私がこれまで書き綴ってきたことには、それなりの理由や根拠があることは確かである。が、それらは私の人生のひとつの側面にすぎない。つまり、この日記には、物事がうまくいかずに困惑している側面だけが記録されているのである（『日記』1925年大みそか）。

日記

現在、ベルリン芸術アカデミーのケーテ・コルヴィッツ文庫に保管されている黒色の油布で包まれた10冊の束になったノートの１冊目は、次のように書き始められている。「私は今日から新しい仕事に取り組むことにした」。日付は1908年９月18日。このように書き入れた女性は41歳になっていた。彼女は、夏の休暇から戻って来たばかりであった。「ひどく空虚な」気分で、「わずかな事柄にしか喜びを見いだせない」。高揚した旅行気分は消え去った。彼女はさらに、「みずからを客観視すること、私は自分がいまだ何も為し得ていないことに怒りを覚える」とも刻んでいる。

そう書き綴ったケーテは、当時すでに、歴史芸術協会から依頼を受けた銅版画の連作「農民戦争」（Bauernkrieg）を完成させるというすばらしい仕事を成し遂げていた。この作品は大方の称賛を集め、彼女はドイツ美術家連盟から、数ヶ月間フィレンツェに逗留することができるという副賞のついたヴィラ・ロマーナ賞を受けた。彼女は、今や、若き芸術家の最前列に立っていたのであり、彼女の動向は、一流の美術批評家たちの注目を集めていた。彼女が制作した版画は、各地の大きな美術館の銅版画収蔵室に収められていた。1903年以来 — つまり『日記』に向かう５年前から —、彼女は「農民戦争」の制作に携わっていた。そして、それを為し終えた今、これからどう突き進んでいくべきか、それが問題であった。

ケーテが『日記』に向かうようになった当時、不機嫌な気分で日々を送り、彼女の感情がかなり苛立っていたことは明らかであった。彼女が好んだ山々の新鮮で澄みきった空気を吸い、あるいは海を眺める生活から、８月の暑い、ほこりまみれのベルリンへ帰って来たのをきっかけに、嫌悪感は年ごとにますます増していった。しかし、そうした芸術上の危機は打開された。退屈であるという「悲惨な」気分を払拭して自らの仕事に向き合わなければならないという感情、つまり、一時的に中断していた版画制作の仕事に全力を傾けなければならないという感情に彼女は突き動かされていった。

彼女の芸術家としての仕事のなかにみられるこの一大変革は、馴染んできた感情を振り切ること、つまり、これまでの日々の生活感情に対し或る種の決着をつけようとする志向と符合している。ケーテ・コルヴィッツにとって、人生の或る段階が終わりを迎えたのであった。息子たち、つまりハンス（Hans）とペーター（Peter）

は、すでに手がかからなくなり、立派な成人になっていた。そうなると、これまでの子供たちの世話から解放され、彼女の結婚生活は日々凡庸に過ぎていった。彼女は、そうした単調に明け暮れる日々を過ごすことに悩んでいた。ウィーンの書籍出版業者で音楽代理業者のフーゴー・ヘラー（Hugo Heller）との親しい関係も、おそらくケーテの意思で断ち切られた。彼と共同して人生に向き合い、仕事をこなしていく（ein gemeinsames Leben）という考えは捨て去られた。彼女にとって今後の人生は、もはや未来を意味するものではなかった。しかもそれだけではなく、ますます過去に沈潜するものとなっていったのである。

ハンス・コルヴィッツは、母親ケーテに関して、彼女は「年を重ねるごとに制約を受けざるを得ない人生とどう折り合いをつけ、納得すればよいのかということに思い悩み、そのことにいつも圧迫感を感じていた」[1] と述べている。更年期は気分を圧迫し情緒不安定で、或る種の奇妙な性的夢想で以って、あらかじめその兆候を示す。老化が始まりつつあるという息苦しさが胸を締め付け、その予感がひたひたと忍び寄ってくる。― 日々体験する事柄や心配事、それらが、芸術家としてやっていけるかどうか確信がもてないという、およそこれまで思い及ぶことのなかった不安感と結びついて、今後のみずからの人生と向き合うよう急き立てたのであった。そうした人生の局面において、彼女の日記は書き始められたのである。

しかし、日記を書き始めた以降の彼女の周辺に起こった出来事だけがこの日記には記されていると考えるとするなら、それは間違っている。というのも、ケーテの日記には以前の出来事も書き留められており、息子たちの子供時代のこと、1907年のイタリア旅行についても、この日記から確かに読み取ることができるのである。そうした事柄を記したメモ書きは、現在失われている。もちろん、以前に起こった出来事が、日記に記された内容ときちんと合致するものであるのかどうか、それに関してはもはや確認することはできないのであるが。

『私の両親』という本を書いて欲しいという息子ハンスの願いに応じて、1923年、

1）ケーテ・コルヴィッツ『私は愛情に満ちたまなざしで世界を見た―自伝的文書で綴る或る生涯』、ハンス・コルヴィッツ編、ハノーファー、ファケルトレーガー1968年（翻刻権取得版：ヴィースバーデン1979年、1983年第７版）、５頁。

ケーテ・コルヴィッツは彼女の回想録を書き残すことにした。その結果、二つの作品が書きあげられた。『思い出』（Erinnerungen. 1923）と『過ぎ去りし時代への回顧』（Rückblick auf frühere Zeit. 1941）[2] がそれである。実は、彼女はさらに続きを書き進めようと考えていた。それゆえに、ケーテは1943年８月初め、爆撃の危険に晒されていたベルリンからノルトハウゼン（Nordhausen）に住む若い彫刻家マルガレーテ・ベニング（Margret Böning）のもとへ疎開したとき、かなりの程度出来上がっていたと思われる新たな回想録の草稿を携えて行ったのであった。この新たな回想録を執筆するために参照し活用し終えたノートや手帳などは持ち運ばれることなく、そのままベルリンの自宅に置いていった。しかし、それらは、数えきれないほどのメモ類や何葉もの版画とともに、ベルリンのヴァイセンブルグ通り（Weißenburgerstraße）にあったケーテの家が爆撃にあった際、すべて焼尽に帰してしまった。

この日記が後に公刊されることをケーテは前もって考慮していたのかどうか。それに関しては、あり得ないことであると、はっきりと言えるであろう。それというのも、ケーテは、言語による、あるいは文章によるみずからの表現力に対して自信を持つことが出来なかったからである。元来、自分は著述の才に恵まれてない、と彼女は思っていた。— が、そうした理由によるだけではなく、何よりもまず、日記を公表するという考えは、私的な秘密事項は守られなければならないというケーテ・コルヴィッツのなかに深く根付いた思想と相容れないからである。ケーテと近しい関係にあった人の次のような叙述からも、彼女の性格を読み取ることができるであろう。その人は「ケーテは、総じてみずからの感情を、そう、個人的な事柄に関してはほとんど口にすることはなかった」と記している。[3] ハンス・コルヴィッツは、そうしたことのなかに両親や祖父母の育った家風を感じ取っていた。「なるほど彼の仕事は価値があり重要であるかもしれない。しかし、それは彼個人の性格とは別の問題だ」。ケーテにもっとも信頼されていた妹リーゼ（Lise）も、ひとは「あまりにも個人的な私的な事柄にかんして」口にしてはいけない、とケーテが語っ

2）本書『日記』に収録されている自伝的補遺、参照。
3）ケーテ・コルヴィッツ『日記の断片と手紙』、ハンス・コルヴィッツ編、ベルリン1948年、1949年第２版、８頁。

たことを覚えている。[4)]

「あまりにも個人的な私的な事柄」に向き合うとなれば、その相手は、まさに日記であった。みずからの仕事と取り組むこと、夫カールと息子たちとの関係について思慮すること、政治的あるいは芸術上の立ち位置を追求すること。さらにまた、1914年以降の、戦死した息子との会話もそうである。大みそかにはその一年を振り返るべく日記に向き合い、綴られていった。「この一年、うまくいきましたか？　大過のない一年でした」。1912年の年末にはそう記されている。その次の年には、「私とカール？　すごくいいですよ。実際には依然としてあまりよくないの」。彼女の本来の、つまり芸術家としての仕事のなかで、自画像がケーテによって繰り返し試みられ、本人自身を尋問し点検する姿を提供しているように ― 自分自身との対話、その折々の精神状態を記憶に留める視覚的方式 ―、大みそかに日記に綴られる新年に向けての総括書、バランスシート（Bilanzen）も、自分自身と純粋に向き合いたいという彼女の根強い欲求に相応しいものであった。

日記には、内面的な事柄だけでなく日常の外面的な出来事も記されている。家族の生活、たとえば祝い事や旅行、友人宅への訪問、展示会、分離派（Secession）の集会。それに加えて芸術上の体験、たとえば音楽、演劇、文学。― その折々に感受した魂の状況を説明するために、しばしば、かなり長い引用が日記のなかでなされている。

規則正しく日記に向き合い、しかも長時間にわたってペンを走らせることは、日常生活の中で日々実践出来ることではない。ケーテの日記にも、かなりむらがある。1908年には、９月にたった３回、日記に向き合っただけである。それから後、1909年８月まで何も記されていない。その後もしばしば、彼女は長期にわたって日記に向かうことなく、空白の時期が繰り返されている。とりわけ、息子ハンスの学生時代にあたる頃、それが目立っている。ハンスとの詳細な、かつ活発で生き生きとした手紙のやり取りは、多くの点で、ケーテの日記の役目を果たしているように思われる。とくに、1916年、また1918年から1921年までの、つまり戦争や革命の起きた

4）ケーテ・コルヴィッツ『友人の手紙と諸々の出会い。ハンス・コルヴィッツ編による日記およびケーテ・コルヴィッツに関する記録の補遺を含む』、ミュンヘン1966年、145頁。

年の手紙には、そのことがもっともよく表れているであろう。その時代に、混乱した外界の動きと並行して、ケーテ・コルヴィッツの政治的 - 精神的な価値観のなかで変化が生じ、新たな志向が芽生えていった。

1933年以降、情況に対するケーテの発言が、これまでと異なってめっきり少なくなり、彼女は社会批評を控えた表現をするようになっていった。これは、国家機関によって家宅捜査や尋問が行われる恐れがあることと関連していることは確かである。というのも、ケーテ・コルヴィッツは社会主義者、平和運動家として当局から嫌疑をかけられていたからである。それも確かに理由のひとつであるには違いないが、しかし、社会批判が乏しくなっていったことは、彼女のなかにはっきりと感じられるほどの活力の衰退、諦めの念が日々強まっていったことの表れでもあった。「手紙というものは、それを書き終えない前に私のなかでひどい疲れを覚えます」。1935年、ケーテは或る女友達に宛ててこう記した。「それと同じように、私は、日記に書き込む（Eintragung）、日々記す、ということも — 日記に向き合うことをひとはそう言うのであれば — その気がなくとも途切れてしまいます。かといって、私には続行することもできません。ひとは老人になるにつれ、ますます言葉を失ってしまうように思われます」。[5)]

日記は —「それは日々記すものというのなら」—、一種のメモ帳のようなものになってしまった。ケーテの日記には、しばしば日付も記されることなく、政治的出来事、熟考、心理的考察、逸話的な話題などが記録されている。が、もはや以前のような詳細な記述はない。しかし、言葉の選択においては、以前と同様、誠実であり的確であった。ケーテは、まだ学生であった頃の息子に対し、言語上の誤りを、多少非難の意を込めて、次のように指摘したことがあった。「あなたは、雪があなたの足元でギシギシ音を立てて足もとにくっつくと、雪について書いています。しかし、そのように雪を一緒くたにすることはできません。雪解けの陽気の場合には足もとにくっつくし、凍てつく寒気の場合に雪はギシギシと音を立てるのです」。[6)] 70歳になってなお、彼女は、文章を書き記す際には思うところを正確に伝える、と

5）同書、100頁。
6）ケーテ・コルヴィッツ『息子への手紙、1904-1945』、ベルリン1992年、41頁以下。

いうことに留意していた。ケーテは、文章を削りに削り、何度も推敲を重ねている。ぞんざいな文を嫌い、やっつけ仕事をすることを自らに許さなかった。ケーテの書き記す力強い、明晰で生き生きとした言葉は、正確に観察する造形芸術家のまなざしに裏打ちされていることがわかる。あらゆる点での彼女の分析の確かさ、鮮明さは、頓挫することなくずっと保持され、高く評価され得るものであった。

1948年、ケーテの長男ハンス・コルヴィッツは、手元にある資料をもとに、抑制のきいた彼女の最初の選集を作成した。さらに彼は、ケーテの書簡や回想録、また、彼女の子供の頃や青春時代についてかつて書き留めたものを追加した増補版を出版した。[7] それほど分厚い本ではなく、しかも様々な典拠から寄せ集められ編集されたといった印象を与えるこの一巻本は、戦後初期の木質繊維を含んだ粗雑な紙質で印刷された。しかし美しい肖像写真もその本には挿入されていた。この著書が公刊されたことによって、1933年以来忘れ去られたかにみえた一人の女性芸術家との出会い、あるいは再会の最初の機会が提供された。同時にまた、その本によって、この女性芸術家のまったく新しい人物像が浮かび上がって来た。— つまり、著述家としての姿が。「私たちはこの本を、近年読むことの出来た人物伝のなかで後世に残る数少ない出版物のひとつである、と言うことができる」。この作品に対して、テーオドール・ホイス（Theodor Heuss, 1884-1963. ドイツ連邦共和国初代大統領 - 訳注）は喜びの気持ちをそう表明した。[8]

その後、ちょっと姿を変えた形で幾度か復刻された[9]この版は、1968年、ハンス・コルヴィッツによって、ページ数は増えたが、しかし必ずしも十分に満足のいくものではない第二の選集となって刊行された。この選集は、日記のメモや手紙の抜粋を優先する事柄であると捉え、それらを独立した章立てにしてひとつに纏めたものであった。[10] そうすることによって、なるほど多くの点でケーテの人柄を知る証言は増大したものの、彼女の残した足跡の生き生きとした進展、そこから展開される躍動感は壊れてしまった。

7）前掲『日記の断片と手紙』、注3、参照。
8）前掲『友人の手紙』、７頁。
9）本書『日記』の編集方針の記録、35頁参照。
10）前掲『私は愛情に満ちたまなざしで世界を見た』、注1、参照。

芸術家ケーテの生誕百年を迎えた1967年以来、ちなみに、その年の誕生日には東西ドイツで大きな、一部では綱領に即した展示会が挙行され祝われたのであったが、その年以来、不断に増大するケーテへの関心、いわばコルヴィッツ - ルネッサンス（Kollwitz - Interesse）とでもいった動きが、確かに認められる。優れた版画が収集され、コレクションが充実し、移動展示会が開かれることによって、ケーテ・コルヴィッツの作品が他の大陸にも知られるようになった。第一級の典型的な近代精神への、表現主義への、政治問題に真剣なまなざしを向ける芸術への追憶が、人々の目を彼女の作品へと向けたのであった。ケルンとベルリンでは、各々固有の精神を持ったコルヴィッツ美術館が誕生した。それと並行して、国際的な美術品市場では彼女の作品に対する新たな評価が起こって来た。このような高い評価が、彼女のこれまで公表してきた数多くの作品に示されることになった。

1945年［戦争が終結した年であり、ケーテが死去した年でもある - 訳注］後、ケーテ・コルヴィッツの作品の本質のなかに、とりわけ政治的 - イデオロギー的内容を読み込んで解釈された。つまり、そこに彼女の「使命」（Botschaft）を感じ、そう受け取った。こうしたケーテ解釈は、ときおり、政治的な女流芸術家、つまり平和と正義のために戦う闘士、労働者階級の代弁者といった一面的な、偏った像を、彼女のなかに感じることに連なっていった。今回、彼女の日記がすべて公刊されることによって、こうした一面的な見方を修正し、幅広く多面的に彼女を見ることができる。これらの日記は、個人的な事柄や、あるいは、夫や息子たち、妹のリーゼ、年老いた母親や親しい友人といった、ごく限られた範囲の親しい人々に言及しているので、ケーテの全体像を明らかにする。それは、生々しい人間ケーテを目に見えるように浮かび上がらせる。女性であり芸術家である — という彼女の逡巡と不安、しかし、同時にまた、その感性や官能性、生きる喜び、人間や人間に連なる諸々の問題への強い関心がそこにはある。

人生の後半期

ケーニヒスベルクにあったケーテの両親の家は、元来、心の奥底からの道徳的-人道主義的な姿勢で物事を考え、感受する雰囲気に満ちた家であった。ケーテの祖父であるユーリウス・ルップ（Julius Rupp）は、家族の、また彼によって設立さ

れた福音書の教えに基づく自由教団（freie evangelischen Gemeinde）の精神的な支柱であった。彼は、共同体的な所有、社会の障壁の解体といった原始キリスト教的な理想を追い求めていた。ケーテの父カール・シュミット（Carl Schmidt）は、妻の父親であるルップから受け継いだ宗教的信念を自由主義的-民主主義的な1848年［ドイツ三月革命の起こった年 - 訳注］以来の伝統と結びつけた。彼は、70歳を超えた年になっていたにもかかわらず、それでも社会民主党に入党した。ケーテに「社会主義への手ほどきをした」彼女の兄コンラート（Konrad）は、長年にわたり継続してマルクス理論を研究していた。彼は、晩年のフリードリッヒ・エンゲルスから親しみのこもった激励を受けたこともあった。若きケーテは、彼らの存在や、また彼らの抱く政治的希望に満ちた雰囲気のなかで育ったことに感謝している。ここに、彼女のユートピア的 - 理想主義的な夢、願望の基礎があり、同時にまた、それが彼女の社会問題に対する鋭敏な感受性の原型ともなったのである。

しかしながら、革命的な訴えが描かれたケーテの初期の連作版画（織工たちの蜂起 Ein Weberaufstand、農民戦争 Bauernkrieg、ジェルミナール Germinal）は、元々、文学作品の影響を受け、その衝撃に突き動かされて制作されたものであった。その意味では、フライリヒラート（Freiligrath）、ゾラ（Zola）、イプセン（Ibsen）、若きゲルハルト・ハウプトマン（Gerhart Hauptmann）が、ケーテのそうした初期作品の精神的父親であった。彼らの社会批判は、ケーテの作品の中で拡大され、現実化されていった。「困窮」（Not）は、ケーテ・コルヴィッツの場合、紡績機械の発明の結果、シュレージェンの織工たちの何ら望みのない境遇を意味するだけではない。労働者階級全体が悲惨な状態に陥ることを嘆き悲しんでいるのである。「一揆」（Aufruhr）や「蜂起」（Losbruch）は、16世紀に南 - 中央ドイツの農民たちによって実際に起こされた反乱、その歴史上の出来事を、革命の勃発そのものに拡大した作品であった。

しかしながら、ベルリン北部の労働者居住地区に住む医者の妻として、大都市のプロレタリアートの抱える多くの未解決の問題と日々直面して初めて、ケーテは、19世紀初頭の社会の現実と真摯に向き合い、激しい憤りを胸に秘めることになったのである。それが彼女のその後の姿勢を決定した。その思いを芸術の形に転換すること、ケーテのまわりで日ごとに起こる悲劇を繰り返し繰り返し描写すること、そ

のことだけが「生きていくための捌け口であり、生活に耐える可能性を私に切り開いてくれるものであった」。[11)]

ケーテは、みずからを政治的には社会主義者だと感じていた。が、論理だってじっくり検討した結果、社会主義を決断したといった意味ではなく、また、その党派の一員といった意味でもない。ケーテの「政治に向かう姿勢」（Politisieren）は、彼女が記すように「信念に基づくもの」[12)] であった。社会主義者としての意識といったものよりも一層研ぎ澄まされた社会問題に対する彼女の眼差し、その感性が、労働者階級との関係、それへの彼女の親近感を作り出すのに決定的役割を果たしている。彼女にとって、社会の現状に対して暴力によって変革することを目指す階級闘争的な視点と比べて、むしろ、祖父ルップのような牧師と信徒の信仰団体、兄弟団の希望（die Ruppsche Bruderschaftshoffnung）のほうに親しみが持てた。ジンプリチシムス（Simplicissimus）［おもに政治風刺を内容とする週刊誌 - 訳注］のために1909年から1910年にかけて描かれたシリーズ「悲惨の図」（Bilder vom Elend）も、告発するというよりむしろ嘆き悲しむ姿が写し出されている。この一連の作品がもたらした社会批判的な風刺の鋭さというのは、ケーテの絵そのものが内包しているというよりも、むしろそれらが掲載された雑誌編集部によって書かれた辛辣な説明文によるところが大きい。

第一次世界大戦の勃発は、国家に忠実な社会民主党員としてのコルヴィッツ夫妻にとって、当然の出来事、その帰結と思われた。コルヴィッツ夫妻は、1914年に大多数の作家や芸術家たちを愛国的な熱狂の渦に巻き込んだ国家主義的な興奮状態に呑まれることなく、そうした興奮と距離を置くことはできた。しかし、そうはいっても、やはりケーテやカール・コルヴィッツも、自分たちは何といっても先ずドイツ人である、と感じていた。そしてドイツ人たちは、彼らの祖国が攻撃され、危機的状況に陥っていると思っていた。大半のドイツ社会民主党員と同様、ケーテ夫妻も戦時公債や議会内の党争停止に賛成した。「我等」（Unsrige）の進撃を、夫妻は緊張と希望をもって見守っていた。1914年10月、西部戦線の前線部隊への志願兵で

11）「過ぎ去りし時代への回顧」、本書『日記』収録の補遺、736頁参照。
12）ハンス・コルヴィッツ宛てのケーテ・コルヴィッツの手紙、1916年４月14日付け、未公刊（ベルリン芸術アカデミーのケーテ・コルヴィッツ文庫所蔵）。

あった息子ペーターの死を、夫妻は、憂慮と心痛に苛まれながらも、みずから進んで志願して生命を捧げ、犠牲になったと感じていた。戦死した息子や彼の友人たちとの連帯感によって維持された国家への忠誠心、祖国愛が、将来の社会は平和主義と国際主義によって刻まれなければならないといった信念によって押しのけられるまでには、苦痛に満ちた長い時間の流れを必要とした。多くのヨーロッパの芸術家や知識人たちがそうであったように、ケーテ・コルヴィッツもまた、ロシア革命を大きな希望でもって好意的に受けとめた。ケーテは、そこに、新たな天地創造、硬直化し柔軟性を失った戦前の社会構造をひっくり返すエネルギー、心を急き立てるような溌剌とした力が表明されているとみた。すなわち、その革命によって、真に人間的な社会がトルストイの思想で満たされ、兄弟のような世界というかつての人類の希望が実現されるであろう、とケーテは思ったのである。

他方、ドイツにおける革命に対して彼女は、逆に、疑いの目を向けていた。「実際に生起したものは、人々が夢に描いてきたものとどこか様相が異なったものなのです。…子供たちはちっとも驚嘆する心をもった子供（Wunderkind）に育っていかないし、その子供たちの感動することを忘れた両親とどこかそっくりなのです」。[13] 日々繰り返される政治的な憎悪や暴力が、彼女をうろたえさせ、平静な心を失わせた。ケーテは、自由、進歩、平和、社会的正義といった人類の偉大な夢を大きく裏切るような現実に苦悩していた。— そうした人類の夢は、彼女の夢でもあったのである。「もし現在、私が若かったならば、私はきっと共産主義者になっていたであろう。そして今でもやはり、彼らの主張には、なにかしら私を引き寄せる魅力がある」。日記に、ケーテはこう告白している（1920年10月）。しかし、彼女は、もはや自分はそう若くはないこと、肉体的にも精神的にもへとへとで疲れ果てていることを自覚する。彼女は、或る社会主義を切望する。「人間を生かす、人間が生きていけるようになる社会主義を」（同年同月）。

ケーテ・コルヴィッツは、これまで以上に気構え、心を用いて、共に人間が生活していくことのできる新たな形式を発展させるため、ソヴィエト連邦のなかで模索されている理想を追い求めた。共産主義社会の土曜日のあり方について、ゴーリキー

13）ベアーテ・ボーヌス - イェーブ『ケーテ・コルヴィッツとの60年にわたる友情』、ボッパルト1948年、162頁。

が期待した施策やレーニンが発言した内容、たとえば、見捨てられた子供たち（Besprisorny）に関すること、「家庭のない」（Unbehausten）子供たちの共同養育（Kinderrepubliken）に関すること等 — それらすべてが彼女を感激させた。ヴォルガ流域での危機、食糧難を救済するための、世界中の進歩的な芸術家や知識人に向けられた声明に従い、彼女は、その救援組織の人々とともに全力でその呼びかけに取り組んでいった。救援会の協力者、またドイツ - ソヴィエト協会の設立参加者として、ケーテは、ポスターや声明文の作成、芸術家の募金活動や署名運動など、国際労働者救援組織の活動、また彼女によって設立された芸術家救援組織の活動に奔走した。

彼女の前半期、つまり1914年以前にすでにその萌芽が認められるように、ケーテ・コルヴィッツは、20代でみずからの芸術を「武器」（Waffe）と自覚して仕事に向かっていた。すなわち、飢えや戦争に対する、暴利をむさぼるひとがいる一方で家内労働者が貧困にあえいでいる現状に対する、仕事場でのアルコール中毒や投げやりで無思慮な振る舞いに対する、戦争捕虜の釈放を求める、218条項の改革を求める、母乳の集積場を求める武器として。「私の芸術活動にはそれなりの意味がある。そのことを私は承知している。人間がきわめて困難な状況下で途方に暮れ、救いの手を差し伸べているこの時代に、私はこれらの人々の役に立つ仕事がしたい」。ケーテは、芸術のための芸術を標榜する批評家に抵抗する。彼女の祖父ユーリウス・ルップの人生訓によれば、各人の天賦の才というものは、同時にまた、その人の責務でもあった。「多くの人々が、今、社会のために活動し、手助けしたいという使命感を感じている。私のすすむべき途は、すでに明らかであり、私はそれを自覚している」（1922年11月）。

ケーテは、芸術家としてのみずからの責務をはっきりと自覚していた。が、それだけにまた、彼女の政治的な立ち位置に関しては、はっきりせず不明瞭な点があった。ケーテは決して革命論者ではなかった。彼女の場合、その点は明らかである。が、それに加えて、ケーテは、社会民主主義者の観点に立って物事を見ていたのだろうか。彼女は、いったい、民主党や彼らの掲げる自由主義的な目標に気持ちが傾くことはなかったのだろうか。平和主義に対してさえ、私は無条件にその陣営に属する、とケーテが公言することはない。—「つねに私の心は、あれこれ揺れ動いて

いる。…錯綜した複雑な社会関係のなかで、状況を的確に把握し、進むべき道の見当をつけるということを期待するのは、そもそも芸術家にとって、しかもその芸術家が女性である場合には尚更、無理な話である」（1920年10月）。

ケーテ・コルヴィッツの仕事は、早くも20代初期の頃からすでに、政治的あるいは人道的な訴えを公に示す強烈な社会参加の意思を窺わせるものであった。その一方で、彼女の日記の中では、ほとんど彼女の個人的な、プライベートな生活空間へ戻った姿が、はっきりと描かれている。ハンスとの結婚、リヒテンラーデに住んでいる孫、友人たちの運命、病気、旅行、— とりわけ —　仕事の浮き沈み、それらのことが折々に書き込まれている。しだいに、芸術家としての仕事においても、政治的要素が弱まり、背後に隠れていった。ケーテは、みずからの政治的立場を明らかにすることを控えていた。が、政治的な態度決定を明確にすることから一定の距離を保つことは、年を重ねるごとにますます困難になってきた。多くの方面から態度を決めることを絶え間なく促され、そうした重苦しくなってくる空気は、そうでなくても彼女のだんだんと衰えていく創造力、制作へ向かう気力を奪っていった。出来上がった作品も、ケーテには納得のいかない仕事のように思われた。彼女は、みずからのことを鈍感で関心も消え失せ、心が空っぽになってしまったと感じるようになった。彼女には、あらゆることが、すでに以前に訴え、語りつくしたことの繰り返しのように思われたのであった。

1927年、ケーテはロシアからの招待を受け、その国を訪問した。そして、その旅行が、加齢による消沈、抑鬱（Altersdepression）から、彼女をもう一度立ち直らせることになった。ケーテは、その旅行を「まるで虫干しされ、新鮮な空気に洗われたようだ」と感じた。「私は、今回の旅を鬱につけ込まれることなく、冷静な眼差しであらゆるものを観察しようと考えた。私は、もはやとどまることができない。ロシアは私を突き動かした」。[14)]

17年間の制作過程を経て、1932年、ケーテは、国立美術館のロビーで、「嘆き悲しむ父と母の像」（die beiden trauernden Elternfiguren）を展示した。この両親の彫像は、数週間の後、ロッヘフェルトにあるドイツ人戦没者墓地へ最終的に設置

---

14)『1914年から1933年変革の年まで』、本書『日記』収録の補遺、747頁。

された。戦死した息子に捧げるという約束が果たされた。肩の荷が下りた。

1933年、ドイツで国家社会主義者が権力を掌握した。ケーテ・コルヴィッツは、諸々の左翼政党の選挙協力を呼びかけた声明文に署名をしていたので、プロイセンの芸術アカデミーから脱会することを余儀なくされた。ケーテは教授許可を剥奪され、アトリエから出て行かざるをえなかった。ケーテの夫は健康保険医の認可を取り上げられた。息子ハンス［勤務医であった - 訳注］も、一時的に職を失った。ケーテ一家はマリーエンバートへ逃れることによって、荒れ狂う政治の第一波から身を守った。が、４月中旬には彼らはベルリンへ戻った。—「確固たる思いで自宅に留まる」（1933年２月15日）ことにしたのであった。ケーテ夫妻は、もとより彼らには亡命生活を可能にするような経済的なゆとりもなかったのではあるが、それにも増して、ハンスと彼の家族、妹のリーゼ、友人たちと離れたくなかった。同時にまた、これまで同様に患者たちと関わりあい、作品の制作も継続したいという思いもあった。夫妻は二人とも健康がすぐれなかった。カール・コルヴィッツは70歳になっていた。夫妻は先ず、新たな状況にあって心が動かされるものを見いだし、それを正当に評価しようとしていた。—「それは少なからずあった。…が、全般的に言って私たちは、状況に歩調を合わせることが出来なかった。というより、逆に、完全に拒否せねばならなかった」。彼ら二人をもっとも悩み苦しめたのは、ユダヤ人迫害であった。「カールは、それは私がこれまで体験したことのなかでもっとも酷いものであった、と見てきたことを私に伝えた。が、彼は、そうした悲惨な状況を報告しつつ、時折、言葉に詰まって話し続けることができなかった」。[15]

しだいに、ケーテ・コルヴィッツの周辺も深い沈黙に覆われるようになっていった。彼女の作品は美術館から取り除かれていった。コルヴィッツ作品の展示は禁止されたのである。「見過ごし黙殺すること、それがそうした事態に対して用いられた方法でした」。[16] 1937年７月、ミュンヘンで開かれた「退廃芸術」（Entartete）展にケーテの名前は見つからない。が、それが意味することは、彼女にとって「ここではすでに過去に死んだ者に数えられていたのであり、より正確にいえば、もはや生きる資格がない者に属する」と周囲から見られていることを承認せざるを得な

15）同書、同頁。
16）前掲『友人の手紙』、35頁以下。

い、ということであった。[17]

第二次世界大戦が勃発したことに関し、日記のなかでは何ら論評を加えることなく書き記されている。概して、その前年から日記に書かれた内容は、個人的な事柄についての手記が圧倒的に多い。つまり、1939年２月から1940年７月にこの世を去るまで続いたカール・コルヴィッツの病気のこと、1940年の春に軍隊に召集された孫のペーターについての気掛かり、不安などが、日記の主要な部分を占めている。1942年９月にペーターが戦死して後、ケーテが日記に向かうことはほとんど無かった。ノルトハウゼン［1943年当時のケーテの疎開先 - 訳注］に移住して以降、もはや日記には何の書き込みもない。

ケーテが、今後の計画や予定など ― たとえば、医師の訪問など ― を記しておくことの必要を感じた場合、また、住所や出費を書き留めたり手紙の草稿を書くといった場合には、四つ折り半のメモ帳を用いていた。一番小さな孫アーネ（Arne）が、クリスマスの日に「私の愛するおばあちゃんのために」記したメモ書きにはカレンダーの裏面が用いられていた。77歳になったケーテは、ザクセン皇太子エルンスト・ハインリヒ（Ernst Heinrich）の招きに応じ、1944年８月、ドレスデン近郊のモーリッツブルクに住まいを移した。そのモーリッツブルクにおいても、ケーテは、リューデンホーフの窓際で安楽椅子にすわり、雲の流れや秋めいてきた木立、湖水を観察するとき、そうしたメモ帳を膝の上に置いていた。彼女は自然が作り出す色合い、姿形、その動きや変化をしっかりと記録に残し、時の移ろいゆくさまの手掛かりをつかもうと試みていた。

しかし、肉体的な衰えは顕著になっていった。彼女の視力は弱まり、「あらゆることが秩序なくごちゃごちゃになって脳裏をよぎっていく」[18] ことに悩み苦しんだ。夜な夜な襲いかかってくる心臓発作の苦しみが身にこたえ、年老いたのだという思いが、未だかすかに残る彼女の生きる気力をも失わせ、死へのあこがれが募っていった。そうしたなかにあってなお、時折、短文の手紙やはがきを書き綴っていた。― が、しばしば、そこに記された文字はほとんど判読不能であった。というのも、も

17）同書、35頁。
18）リーゼ・シュテルン宛てのケーテ・コルヴィッツの手紙、1945年２月１日付け、前掲『日記の断片と手紙』所収、171頁。

はや彼女の視力は効かなかったのである。メモ帳を手にすることもなくなった。それらのメモ帳をしっかり保存しておくことには重要な意味があったであろう。しかし、残念ながらそれらのメモ帳も今は現存しない。

カールと息子たち

1884年にケーテ・シュミット（Käthe Schmidt）が幼なじみ（Jugendfreund）のカール・コルヴィッツと婚約したとき、ケーテはまだ17歳であった。カール・コルヴィッツはケーテの４歳年上で、ザームラントのルーダウ出身、飲食店の息子であった。彼は早くに父親を亡くし、またその数年後には母親をも亡くしてしまった。早い時期から、カールと彼の級友コンラート・シュミット（Konrad Schmidt, ケーテの兄 - 訳注）とは、ともに社会民主主義的な信念をもった親友同士であった。コンラート・シュミットは、カールをリベラルな空気を志向する両親の家へ連れ帰り、祖父ユーリウス・ルップによって設立された自由教団（freireligiöse Gemeinde）の手ほどきをして、カールを教団に導き入れた。孤児院で育った青年カールは、シュミットの家庭で、またその自由教団のなかにおいても、心休まり、気持ちの温かさを感じていた。教団の仲間を結び付けている兄弟のようなキリスト教精神（der brüderlich-christliche Geist）は、医者になるというカールの決心を強固なものにしていった。ケーニヒスベルクでの勉学を終えた後、カールはベルリンへ移った。1890年、縫製職人の健康保険医に認定されたのを機に、カールは、結婚して家庭を持つことを具体的に考えることができた。それまでにすでにケーテと婚約はしていたが、1891年、ケーテ・シュミットと結婚した。その年、ケーテは24歳であった。婚約期間中、ケーテは、当初ケーニヒスベルクにいたが、後にベルリンとミュンヘンの女子美術学校で絵画や版画の専門教育を修めており、結婚生活に入って後もこの仕事を続けるつもりであった。

カール・コルヴィッツの物事の捉え方は、たいへん人道的であった。それゆえ、医者として彼が担当する区域 — プレンツラウアー・ベルク（Prenzlauer Berg）— で人々から敬愛されていた。彼の主要な職務は健康保険医であった。が、カールに関して言及する文献で、しばしば称されているような「無料施療医」（Armenarzt）では決してなかった。彼は、たんに裏通りに住む労働者家族だけではなく、綺麗な

表通りに住む市民階級の人々にとっても、彼らの良き相談相手、健康教育を施す人であり、慈父のような友人でもあった。つまり、最良の意味で家庭医、ホームドクターであった。しばしば彼は、患者から世代を越えて感謝されていた。彼は病人のために時間を割き、彼らの生活状態やこれまで彼らが歩んできた背景を知り尽くしていた。そして、必要とあれば彼らを無料で治療した。それどころか、逆にカールのほうが、しばしば患者の家に薬代を置いていったのである。「医者はすぐに駆け付けた。— 代金なしで」。[19] かつての患者が、カールが死んで40年余り経った後でも、そのことを思い起こしていた。彼の診察時間は夜遅くまで続き、病気が流行したときには23時まで延びた。しかも、しばしば、そうした診療所での深夜に及ぶ診察を終えた後で、患者の家へ往診に出かけたのであった。彼は、眠っている住人を起こさないよう患者の家や部屋の鍵をかばんに持ち歩いていた。その後、真夜中には専門の文献を読み、また、公衆衛生に関する報告書を推敲するのであった。

家庭生活をはなはだしく制約する夫の有無を言わせないこうした「呪うべき忌々しい診療」（verdammte Praxis）に慣れることは、若きコルヴィッツ夫人にとって決して容易なことではなかった。カールは絶対に働きすぎであり、苛立っていて、いつも急いているという嘆きや苦情が、ケーテの日記のあちこちに散見される。

そのように不平不満を日記に書き込む一方で、彼女は、カールの仕事に強い関心を抱いていた。ケーテは、たびたび診療所にカールを訪ね、彼と一緒に患者の往診に出かけた。時には、彼が治療していた労働者家族のところにカールを伴わずにひとりで訪ねていくこともあった。日記には彼女の受けた様々な印象が記されている。ケーテの初期作品の素描のモデルは、夫のそうした診察時間から生まれたものであった。カールが、その後ずっとケーテの芸術家としてのテーマとなる大都市のプロレタリアートに、彼女の眼を向けさせたのであった。

二人の結婚は、カールのほうが熱を入れた恋愛結婚であった。老いるまでカールは、こまやかな情愛と敬慕の念でもって妻ケーテに理解を示し、彼女が芸術家としての仕事に没頭できるような環境を作るため、あらゆる努力を惜しまなかった。結婚して34年経った後にもなお、カールはケーテのことを彼の人生の「幸運の女神で

19）クリスティアーネ・ノップ「父と多くの家族との親交」、『ベルリーナー・モルゲンポスト』1978年７月23日付け。

導きの星」と感じていた。「喜ばしいもののすべて、良きことのすべてを、君は私に届けてくれた」。[20] 二人の結婚生活のなかで困難な状況に陥り、張りつめた雰囲気になっても、この無条件の愛情は揺るがなかった。どれほど強くカールが妻の芸術と結び付いており感謝の念を感じているかということは、— 或る意味で、ケーテが日記で言及していることよりもっと明らかに — カールの作った別れの詩から推察できる。その詩で、カールは、より自由でさらに熱烈な人生を目指す彼女の願望に応えたのであった。[21] そこにはケーテの芸術に対して抱いていたカールの思い、つまり、彼女の才能をさらに開花させ人類の進歩に役立つよう彼女を導きたい、という希望が綴られている。

或る種の絶対的な結びつき［結婚のことか - 訳注］に対しケーテのつけた条件を私たちは日記から読み取ることができる。それは、彼女が夫に対していつでも親近感を抱くことができ、愛情や喜びを共感することができ、彼の温かさや力強さを感じることのできる時間がもてること — というものであった。が、年月が経つと、夫との生活を窮屈に感じるようになり、結婚生活や家族に縛られることなしに自由に振舞い、仕事をこなし、ひとりで生きていきたいと思うようなこともあった。「結婚生活は一種の労働です」。[22] 幼友達のレネ・ブロッホ（Lene Bloch）にケーテはこう打ち明けている。しかし、カールが死んだ後、ケーテは次のように要約して述べている。「私はこれまでの人生で、波瀾に富んだ過去や様々な感情をもった興味深い人々と知り合いになる機会を十分に持つことができた。が、私が、つましくて目立たないが澄んだ人間の透明な本性といったものと出会ったのは、夫の内面においてであった。女性にあってしばしば、同情や思いやりに続いて愛情へと移行するあの信頼感が、おそらく私が彼に対して感じた第一のものであったかもしれない。そして、彼が死を迎えるまで、彼と私を繋ぐ根底にあり続けたのは、互いに信頼しあうということであった」。[23]

20）ケーテ・コルヴィッツ宛てのカール・コルヴィッツの手紙、1924年１月14日付け、未公刊（ベルリン芸術アカデミーのケーテ・コルヴィッツ文庫所蔵）。
21）本書『日記』1918年７月１日への注、参照［834-835頁］。
22）前掲『友人の手紙』、150頁。
23）クララ・フィービヒ宛てのケーテ・コルヴィッツの手紙、1940年10月、ここでは『ヴェルト』1975年３月22日付け（日曜版）から引用。

1892年と1896年に息子が生まれた。ハンスとペーターである。どちらかといえば、ハンスの方が問題のある扱いにくい性格であった。子供のころは活発で才能に恵まれ、想像力の豊かな子であった。学生時代は厭世感情に苦しみ、閉鎖的で内にこもっていた。大人になると愛情深い息子になった。しかし、家庭を持った父親、夫としては気難しいひとであった。彼の性格、彼の成長、後には彼の結婚生活にかんしても、ケーテの日記には理解のある目でもって、が、同時にまた客観的に描かれている。時折、こうした心理考察に基づいた詳細な経緯、心誌（Psychogramme）が、日記に綴られている。

ハンスに比べると、ペーターは母親にとって育てやすい子であった。彼の愛想の好さ、機敏さ、ユーモアは、いたるところで共感をえた。ペーターが画家になりたいという希望を抱いていたことが、母と息子をより一層緊密に結びつけた。― とはいっても、息子の画家としての才能について、ケーテはそれほど期待していなかった節もあったのではあるが。ケーテにとって、ペーターが「お気に入りの息子」（Lieblingssohn）であったというのは、おそらく伝説（Legende）である。ケーテがペーターにそれほど強く引きつけられたものは、ケーテが彼女自身に欠けている諸々の特性をペーターがもっていたからであった。性格的には、むしろハンスのほうがケーテに似ていた。ハンスに関して「この男の子は、言葉では表現できないほど私にそっくりなのです」。ケーテは友人のイェープ（Jeep）にそう書き送っている。[24] 二人の息子に対してケーテは、時々、明らかに性愛的な含みを伴った或る種の激しい官能的な愛情を感じている。日記の中で、そうした感情についてみずから釈明するさいのケーテの率直さには、目をみはり驚かせるものがある。驚かせることといえば、この母親と息子たちとの間では、性に関すること、同性愛のこと、女性との性的関係などについて偏見にとらわれることなく、ごく自然に話し合われていた。― 性的事柄に関して慎み深く取り澄ましていたヴィルヘルム時代のドイツにおいて、そうした事柄に関し、ごく自然に率直に話し合うということは、決して当然のことではなく、きわめて稀なことであった。

ケーテ・コルヴィッツの精神的成長過程、また芸術家としての成長過程において

24）前掲『ケーテ・コルヴィッツとの60年にわたる友情』、108頁。

も、彼女は息子たちとともに歩んでいる。息子たちと一緒に本を読み、ともに展覧会へ行き、また、彼女自身の仕事に関しても、息子たちと議論を交わしている。息子たちが、母親の手を離れていき、自分の世界を持ち始め、もはやそのなかに母親として付いて行くことができず、その気も失せたとき、初めの頃、そうした状況を彼女は悲しんだ。が、しだいに、残された人生のすべてを自分自身の仕事に向き合っていこうと思うことによって、残された時間は十分あるし私はまだまだ若いと思うことによって、みずからを慰めた。

その頃、戦争が起こった。すぐさま二人の息子は出征した。しかも、ペーター・コルヴィッツは志願兵として。— 彼は、18歳になったばかりであった。ペーターが戦地に赴いて幾週間も経たないうちに、彼は1914年10月23日深夜、フランドルのディクスムイド近郊で斃れた。それとともに、ケーテ・コルヴィッツにとって、彼女の人生そのものも折れてしまったように思われた。ケーテは、もはや仕事を続けることができなかった。彼女は、死んだ息子と彼の友人のために記念碑を作ることを思いついた。その計画によってやっと、彼女はふたたび彫刻の仕事に向き合った。その仕事を進めるなかで、ケーテは、次々と変わっていく構想やつねに新たに芽吹いてくる思想、が、それに対する疑念や落胆、偶には見通しがついたという思いを抱いたりしながら、17年もの長い間、その計画に逡巡し苦心惨澹した。それだけの年月をかけてやっと出来上がった「嘆き悲しむ両親の彫像」（die Figuren der trauernden Eltern）は、最終的に戦没兵士の墓地に設置することができた。それは1932年６月のことで、その墓地には息子ペーターが眠っていた。

長男ハンスは負傷することなく帰還した。彼は父親と同様、医者になった。そして、若くて美しい女性と結婚し、大都会から逃れて生活し、子供をもうけた。この小さな孫ペーター（Peter）は、すくすく成長し一人前になった。— 初孫ペーターがケーテの心の隙間を埋めた。

ケーテにとって夫カールや息子たち（後には孫も）がもっていた中心的な、まさに実存的な意味は、彼女の日記をめくれば、ほぼどのページからでも読み取ることができる。さらに付け加えるならば、ケーテ・コルヴィッツの人生においてもっとも重要なことは何であったかという問いに対して、60歳に近付いていた彼女は端的に次のように答えている。「それは私にとって、子供をもったこと、誠実な人生の

伴侶をもったこと、そして、みずからの仕事」。[25]

兄弟姉妹と友人たち

子供の頃の遊び仲間であり、その性格をよく知っていた妹のリーゼは、唯一の「私にとって本当に親しい女友達」[26] であった。ケーテ・コルヴィッツは回想録にそう記した。他方、リーゼもまた、それを補足するかのように述べている。「ケーテと私は、初めから分身のようなものでした」。[27] リーゼは魅力的で、周りの人々から好かれ、芸術的にも高い才能に恵まれていた。が、その才能を十分に発揮させることなく、最良の意味でのディレッタント（Dilettantin）、アマチュアとしてとどまっていたリーゼは、1893年、ケーニヒスベルク出身の若いユダヤ人技師と結婚した。彼は、短期間のうちにAEG（総合電機製造会社）の指導的な地位に就いたひとであった。リーゼは、ベルリンで夫や４人の娘たちとともに暮らし、姉の家族とは親密な付き合いがあった。シュテルン（Georg Stern, 妹リーゼの夫 - 訳注）の家族は「最愛の友人」（1918年の大みそか）であった。リーゼとケーテは、かつて、よく歩き回り、スケート靴をはいて滑り、歌い、また、お芝居ごっこをして遊んだが、時には、口論になることもあった。二人でともに祝うことのない祝宴はなかった。二人でともに声を出して読まれない本はなかった。二人にとって共通でない友人はいなかった。「リーゼと私はいつも一緒でした」。[28] 75歳になってもケーテは、妹に次のように手紙を書き送っている。「私たちの悲しみ、私たちの望み、私たちの希望は、すべて私たちに共通のものです。あなたのものは私のもの、私のものはあなたのものです」。[29] この一体性はもっとも幸福な形で補完され、完全なものとなった。つまり、そこにカール・コルヴィッツとゲオルグ・シュテルンが加わり、さらにコルヴィッツの二人の息子、シュテルンの四人の娘、すなわち、レグラ（Regula）、ハンナ（Hanna）、カトリーヌ（Katrine, Katta）、マリア（Maria）が加わったのであった。

25）前掲『友人の手紙』、137頁。
26）「思い出」、本書『日記』収録の補遺、727頁。
27）前掲『友人の手紙』、141頁。
28）前掲「思い出」、727頁。
29）前掲『友人の手紙』、129頁。

兄コンラートとの関係は、それほど喜びに満ちた感情で進展していくということはなかった。「それ以来、私もまた彼を仰ぎ見るようになり、彼が私を見守ってくれることを願った」。[30] 妹ケーテは、後年、ベルリンで子供時代や学生時代を想い起こしながらそう記している。その当時、コンラートは、ケーテに1848年代の民主制へ至る道標を教えていた。コンラートと彼の仲間を通じて、ケーテは自然主義文学（literarische Naturalismus）に近づく機会を得たのであった。しかし、相互に親密な繋がりを保ち、これまでと同様に社会民主主義者の仲間のところへ出入りして、かつてのケーニヒスベルクの若い友人たちとの結びつきを絶やさないようにしていたにもかかわらず、ケーテの抱く失望感、気の毒に思う気持ち、さらには、ますます高まってくる苛立ちの感情といったものを日記から感じないわけにはいかない。コンラートはすばらしい学問的な経歴をもっていた。ケーテの苛立ちは、そうした兄コンラートに対する家族の満たされることのない希望と関係しているのかもしれない。すなわち、「敏捷で快活な、そして空想的な少年」[31] であったコンラートは、国民経済学を専攻する優秀な学生でありマルクス主義の理論家、また社会民主主義の期待の星であった。彼は、著名な新聞、たとえば『フォス新聞』（Vossische Zeitung）や社会民主主義的な『前進』（Vorwärts）といった広く世間に知れ渡った新聞社の仕事仲間にはなっても、また、ベルリンの労働者のために設置された教育機関で講師を務めることや自由民衆舞台の座長にはなり得ても、学問的な名声を得ることはなかったのである。なかんずく、彼を苛立たせたのは、実務的なセンスを要する場面でことごとく露呈してしまう彼の不器用さ、注意力の散漫さ、そして、それらがもたらすこっけいで珍妙なバツの悪さ、打てば響くといった感応性の欠如、早期に罹った硬化症による若々しさの欠如であった。コンラートの妹ケーテにとって、そうした早熟のゆえに老化も早いといったコンラートの人生経路の内側には、家族が宿命的に抱えている或る特別な繊細さ、傷つきやすさといったものが関係しているように感じられた。というのも、その背後にはケーテの家族にも迫ってくる運命が宿っているのではないかと、ケーテは疑っていたからである。

コンラートの結婚に対しても、その他の点では社会的偏見に捉われることなく自

30）前掲「思い出」、725頁。
31）同書、720頁。

由な見方をする家族であったが、賛成することはなかった。アンナ・シュミット（Anna Schmidt）は家政婦であった。彼女はきちんと仕事をこなす能力があり、気立てが良く母性的なひとであった。— が、多方面にわたって話題の尽きないこの知的な人々の集まりのなかにあっては、その環境にそぐわない人物であった。誰も彼女と共通点を見いだすことができず、彼女に対して拒否的な態度をとらないまでも、冷やかな態度で接していた。1925年、アンナが亡くなった後、早くに年老いた兄のコンラートは、ヴァイセンブルガー通りの妹や義兄弟のもとに引っ越してきた。しかし、以前のような親しみのある面影が、コンラートにふたたび戻って来ることはなかった。

コンラートとの関係以上にそっけなく、よそよそしく振舞うしかなかったのは、一番上の姉ユーリエ・ホッフェリヒター（Julie Hofferichter）との繋がりであった。彼女は早くに夫を亡くし、二人の子供コンラート（Konrad）とパウラ（Paula）とともに、同じくベルリンで暮らしていた。その暮らしぶりは前々からきわめてつましく、精神的あるいは芸術的に多様で活気のある兄弟姉妹のサークルから完全に外れたところで生活を送った。年老いた母シュミット（Katharina Schmidt, 旧姓ルップ、ルップ家の長女、ケーテの母親－訳注）の誕生日には、家族がみんな集まって祝った。後にはユーリエの娘パウラが加わることもあったが、その盛大なコルヴィッツ家の祝いの場で、ユーリエのことが話題に上ることはなかった。「可哀相なユーリエ」、彼女はケーテの日記でそう呼ばれている。後には、「愛するユーリエ」といった表現もみられるのではあるが、— その頃はすでに、彼女は重い病気に罹っていた。そして、カール・コルヴィッツは医者として、もはや余命いくばくもないことを知っていたのであった。

家族員が増し、子孫が拡がっていくシュミット一家の中心には、年老いた母カタリーナ・シュミットがいた。彼女は、親切で善良な心の持ち主、かつ威厳に満ちた人物であった。すでにどこか健忘症がみられた。— 後には完全に惚けてしまったのではあるが、— 子供たちや孫たちみんなから愛され尊敬されていた。日記には彼女について、長文の愛情に満ちた、時折は困惑しいらいらした気分をも伝える文章が綴られている。1898年、夫が亡くなって以来、カタリーナはベルリンの娘たちのもとで過ごした。つまり、最初は、ケーテの妹リーゼのシュテルン一家のもとで、

1919年以降は（コルヴィッツ一家とともに - 訳注）ヴァイセンブルガー通りで暮らしていた。ケーニヒスベルクに住んでいるカタリーナの兄弟姉妹とともに、カタリーナは祖父母一家や自由教団と親密な間柄であった。祖父のユーリウス・ルップが占めていた一家の中心的役割は、その祖父の死後、ルップ家の長女であるカタリーナへと受け継がれた。そのことはケーニヒスベルクにいるルップ家の親類縁者もみな認めていることであった。

自由教団は少数派（Diasporaposition）であってアウトサイダー的な立場にあった。実は、そうした事情が、多くのルップの子孫がケーニヒスベルクを去って後、かなりの年月が経ったあとでも、彼らを中心にした緊密な関係が引き続き保たれていたということに役立っているのかもしれない。ルップの子孫たちは、時折、ケーニヒスベルクを訪ね、また手紙のやり取りをしていた。日記には、上の世代や比較的若い世代の親類の有為転変、たとえば、彼らの抱えている問題や誰彼が病気になった、あるいは死亡したといったことが、こまかに書き記されている。— そして、死に関していえば、自殺者もけっして稀ではなかった。たとえば、二人のいとこと一人の叔父は、みずから命を絶ったのであった。

きちんとした社交上の付き合いといったものを、コルヴィッツの家族はほとんど心得ていなかった。妹のリーゼ・シュテルンの見解によれば、それは、姉ケーテのそうした事柄に対する「克服しがたいほどの才能の欠如」のせいである、という。ケーテの長男ハンス・コルヴィッツは、それを彼の父親、つまりケーテの夫の仕事があまりに忙しく負担過剰であったこと、また両親の活動分野があまりにかけ離れていること — おそらく、その二つの原因が重なり合って、社交上の付き合いができなかったのであろうと捉えている。そうした原因に加えて、さらに次の点も考えられることであろう。つまり、自由教団というものによって明確に枠づけられた交流範囲、ケーニヒスベルクでのそうした閉ざされた生活空間が刻印され、そうした生活様式が後々の社交上の付き合い方に影響を与えているようにも考えられるのである。いずれにせよ、コルヴィッツの家族や、シュミットまたシュテルン一家がもっとも親密に交流した仲間は、ケーニヒスベルク時代の若い頃から付き合いのあった人々であることは、やはりどこか奇異に感じられる。ゲオルグ・パガ（Georg Paga）、ルイース・セル（Louis Sell）との友情、バイヤー家（Bayers）やその他

の人々との交流は、自由教団においてテーオバルト・ルップ（Theobald Rupp, ケーテの母カタリーナの弟 - 訳注）の生徒か仕事仲間であった時代にまでさかのぼる。カール・コルヴィッツが自由教団創設90周年記念日に寄せた挨拶文で表現した内容は、ケーテ自身にもまた当てはまるかもしれない。カールは挨拶文の中でこう述べたのであった。「ケーニヒスベルクを去り、他の精神的思潮に触れて以来、かなりの時間が経っていますが、私たちは、今、私たちの長い歳月のなかに（in unserem Alter)、まさに生きるための戦いのなかで過ごした時代よりも一層強く自由教団との内面的な繋がりを感じます。私たちはその若き時代にあの人間性に満ちた環境の中で過ごすことが許されたということに対して、心から感謝しております。…教団から分岐して各々の人生の道のりを歩み始めた頃、当時手に入れた精神的に尊い遺産を私たちは多かれ少なかれ自覚しております。それは常に私たちの内に存在しておりました。そして、今、私たちは年輪を重ねることによって、ルップによって設立された自由福音教団（Freie evangelischen Gemeinde）の思想内容を、より明確に認識し、きっぱりと肯定することができます」。[32)]

親戚やケーニヒスベルク時代の古き友人のほかに、若きケーテのベルリンやミュンヘンでの修学時代に知り合った勉学仲間がいた。日記の中で、私たちは彼らと出会うことができる。たとえば、美しいマリア・スラヴォナ - アッカーマン（Maria Slavona-Ackermann)、病身のリンダ・ケーゲル（Linda Kögel)、アンナ・プレーン（Anna Plehn）とその姉妹のローゼ（Rose)、彼女はポーゼンにあるルボチンの大農場主であった。スイス人のローザ・プフェフィンガー（Rosa Pfaeffinger)、彼女はコルヴィッツ家でともに成長していったゲオルグ・グレーター（Georg Gretor）の母親である。

しかし、先ず一番に挙げられるのは、エマ・イェープ（Emma Jeep）である。彼女は ― 文筆家のアルトゥール・ボーヌス（Arthur Bonus）と ― 結婚していたにもかかわらず、何故かこれまで通り「イェープ」と呼ばれていた。心優しく活発で、同時に芸術家の素養を持ったこの女性は、1948年、ケーテ・コルヴィッツと

32）ケーニヒスベルク自由教団創設90周年記念の挨拶文、1936年１月19日付け（ベルリン芸術アカデミーのケーテ・コルヴィッツ文庫所蔵)。

の友情にかんして心からの謝意と愛情に満ちた一冊の本を著した。[33] ボーヌスの子供たち、ハインツ（Heinz）やヘルガ（Helga）が青少年の頃のことであるが、彼らは数か月間、あるいは1年、さらにはそれ以上の長期にわたってコルヴィッツの自宅でお世話になった。たとえば、彼らがベルリンで学校に通っているときや、親と衝突し家に居づらくなったとき等。コルヴィッツ宅もけっして広いというわけではなかった。が、それでも、ベッドの空きがある限り、彼らを迎え入れていた。止むを得ない場合には、診察室の隣の部屋を使用することもあった。イェープの著書にはこれらのことが記されている。

不思議なことに、分離派（Secession）やアカデミーのなかでの芸術家仲間にかんしてケーテの日記から私たちが知り得ることはごく僅かである。そうした組織内の同僚と距離を置き、よそよそしい関係にあったことは明らかである。ひとは通常、諸々の委員会やまたは会議のさいに顔見知りになり、互いに尊敬の念を示しあう。そして、そのひとの業績を評価し、時折は賛美することはあっても、そこからは何等の友情も生まれない、ということはよくあることである。エルンスト・バールラッハ（Ernst Barlach）との間においてさえ友情関係は芽生えなかった。唯一、彫刻家のアウグスト・ガウル（August Gaul）について、「非常に好感を持っており」すべての芸術家の中で彼だけが友人のように愛すべき存在であった、とケーテ・コルヴィッツは日記の中で書き記している（1921年10月23日）。

しかし、ケーテにとって、均整のとれたプロのモデルよりもむしろ疲れきった女性労働者のほうが愛すべき存在であったように、また、しわ一つない可愛らしい顔立ちよりもくたくたに疲れ憔悴したプロレタリアの顔のほうが魅力的に映ったように、ケーテ・コルヴィッツは、日記の中でも、幸福な人や出世し成功した人よりも

33）典拠としては限定的な価値しか持たなくなった。前掲『ケーテ・コルヴィッツとの60年にわたる友情』、注13、参照。この手記の依拠したものは、およそ40年にわたるケーテ・コルヴィッツからエマ・イェープ（ベアーテ・ボーヌス）宛ての手紙である。息子ハンスに宛てたケーテの手紙と並んで、イェープに宛てたこれらの手紙は、コルヴィッツ書簡のなかでももっとも膨大できわめて重要な手紙の束である。しかし、残念ながら、ベアーテ・ボーヌス-イェープは、これらのきわめて個人的な且つ生々しい手紙を出版するために、相互の関連に顧慮することなくばらばらにしてしまった。そして、日付を入れることなく、恣意的に新たにつなぎ合わせてしまったのである。それ故、ケーテを回想する典拠としては限定的な価値しか持たなくなった。

むしろ扱いにくい性質の人、問題を多く抱え苦難にあえいでいる人に関心を示している。たとえば、カトリーネ・レーシッヒ（Kathrine Laessig）、アニー・カルベ（Annie Karbe）、いとこのゲルトルート・ゲーシュ（Gertrud Goesch）とエルゼ・ラウテンベルク（Else Rautenberg）、仕事仲間であったエニー・レーヴェンシュタイン（Änny Löwenstein）。— こうした人々との繋がりは長く続いている。さらにまた、極楽鳥（Paradiesvögel）のように、人生経験を積み上げていく過程で、愛や人生において冒険心のさかんな若い婦人が幾人か思いがけずケーテの前に現れた。彼女たちよりも年を重ねたケーテ・コルヴィッツは、おそらく官能的な色合いも帯びながら夢中になって、若やいだ気分でその人たちに好意を抱いた。たとえば、グレーテ・ヴィーゼンタール（Grete Wiesenthal）、コンスタンス・ハーゲィング-クライル（Constance Harding-Krayl）。（彼女は「スタン」Stan と呼ばれていた）。

数年間、たいへん若い一群の青年たちがケーテの心情の前面に踏み込んできた。戦死した息子の友人たちである。当初、ケーテはその青年たちと共通の喪失感を母親として分かち合い、ともかくも彼らとの付き合いのなかで息子と出会うことができるというほとんど不可解な期待感を抱いていた。つまり、彼らと出会うきっかけにおいては、彼らが息子と繋がりのあるひとであるということが重要であったとしても、しかし、彼らとの付き合いはすぐにひとり歩きし、強まっていった。が、彼らとのそうした親近感、感傷がケーテにとって脅威と感じられるようになったとき、ケーテ・コルヴィッツはみずから身を引いてしまうことになる。「私は母親であることはできるが、しかし、私自身としては他の何ものにも成り得ない」（1916年8月22日）。

ヴァイセンブルガー通り25番地

「ひとが、自分の持ち家でもなく、また、とりわけ素晴らしい家というわけでもないのに、52年間もベルリンで或るひとつの家に住み続けるということ、それはやはり珍しいことである。その家屋は格別に良い造りをしていたというわけでは決してなかった。ただ、その家が角地に建っていたこと、また、ヴェルター広場（Wörther Platz）の向かい側にその家は位置しており、その広場の設備や樹木、低木の茂みなども徐々に立派になっていったこと、大きな貸家であったこと、ベル

リンの北東区域で市街地からかなり離れていたこと。［そうした事柄が、その家にこれほど長く住み続けた理由だと思う。- 訳注］」。[34] 1949年、ハンス・コルヴィッツは思い出をこのように記した。この家にカール・コルヴィッツとケーテは、1891年に彼らが結婚した後、引っ越してきた。３階にある４室からなる住居のうち、２部屋は診察室に使用されていた。２階にはカールの妹リスベート・コルヴィッツ（Lisbeth Kollwitz）が住んでいた。彼女は教師であった。そこの１部屋を、授業のある日の午前中、ケーテはアトリエとして使用していた。後に、ケーテの家族は４階に住居を移し、アトリエは、３階のこれまで居間として用いていた場所に移動された。そのアトリエには、窮屈な廊下をわたっていかなければならなかった。というのも、待合室は通常、混みあっていて、診察を待つ患者さんたちが廊下にあふれ出ていたからである。ケーテ・コルヴィッツの初期の作品はすべて、３階のこのアトリエで制作された。1912年になってやっと彼女は、ジーグムンツホーフ（Siegmundshof）内のアトリエ用施設の一角に部屋を見つけ、そこで彫刻の仕事に取り掛かることができた。ヴァイセンブルガー通りにあるアトリエでの版画制作もこれまでどおり継続された。自宅階下のそのアトリエは、1919年まで、つまり、プロイセン芸術アカデミーの会員として、ケーテに対して大学の所有するアトリエの使用が許可されたときまで、使用され続けた。その年以降、ケーテにとってヴァイセンブルガー通りの３階のその場所を仕事場として使用する必要がなくなったので、カール・コルヴィッツはそこに医療器具を設置した。また、宿泊の用に供する部屋が足りない折にコルヴィッツ家を訪ねてきた客が短期間滞在することになった場合には、医療器具に囲まれたその部屋が提供されることもあった。ハンス・コルヴィッツが両親の家に住んでいた頃には、彼は５階にあった一人部屋を使用していた。

ケーテの家族が住んでいた家のなかで、バルコニーからヴァイセンブルガー通りやヴェルター広場が見渡せる隅の部屋でペーターは寝起きしていた。ペーターが亡くなった後、その部屋は彼を偲ぶ厳粛な空間になった。彼の使用していたベッド、彼が収集した鉱物が入っている収納庫、彼の勉強机 — すべてのものが、幾年経っ

34）ヘルベルト・トゥコルスキー宛てのハンス・コルヴィッツの手紙、1949年７月８日付け、プレンツラウアーベルクの美術陳列室で催された第１回ケーテ・コルヴィッツ作品展（1949年８月20日－10月１日）で公表された。

ても手がつけられずに元のままの状態で置かれていた。はっきりとペーターの痕跡が刻み込まれているこの部屋にいると、ケーテ・コルヴィッツは、死者に親近感を覚えるのであった。ハンスがふたたび戦地に赴かなければならなくなったとき、ケーテが彼に別れの挨拶を交わしたのもこの部屋だった。ケーテは、この部屋にペーターの古い友人たちを案内した。「クレームスは帰る前に、彼岸にいるペーターの部屋に入った」。1915年８月、エーリヒ・クレームス（Erich Krems）が訪れたことを、ケーテは日記にこう書きとめた。「クレームスがペーターの部屋から出てきたとき、彼の顔は慈愛に満ちた表情で輝いていた」。1919年、ケーテの年老いた母親シュミットがコルヴィッツ一家と一緒に住むことになり、引っ越してきた。その年からやっと、その部屋は「世俗化」（säkularisieren）された。― ケーテにとって、悲痛な思いに苛まれ、ためらいを感じながらも、そうせざるを得なかったのである。

ケーテ家の住まいの中心には広い居間があった。そこには長円形のテーブルや緑色の畝模様のあるソファーが置かれ、また、横幅のある黒ずんだ本棚、天井まで延びたタイル張りの暖炉が設置され、壁には「少女の頭部」という題のフェルメールの絵画（Vermeer-Mädchenkopf）が掛かっていた。リーゼ・シュテルンが述べるところによると、「コルヴィッツ家の基盤は、言うなれば宗教的な表象を備えた敬虔な場所のように、変わることがなかった」[35] という。その場所で一緒に食事を摂り、そこへ多くの人々がやって来て助言と助力を求め、また、様々な祝宴が催された。息子たちの芝居の上演もこの部屋で行われた。1938年、クロスター通りにあった最後のアトリエを引き払わなければならなくなったとき、ここはケーテが作品を制作する場へと整えられていった。陶土の原型や石膏などが、乾燥しないように湿っぽい布切れで覆われながら、そこかしこにある高い台座の上に置かれていた。

1939年、カール・コルヴィッツは健康保険医の仕事を止めた。彼は重い病気に罹ってしまい、なかなか回復の兆しもみえてこなかった。が、彼は「回復することを願い、もはや診察することなど出来ないであろうとは信じたくなかった。…住宅の階下の、ほぼ50年間ずっと彼の名前が掲げられ、患者が出入りしていたその部屋には、いまや知らない医者が住んでいる。彼は若い医者で、カール自身が開業当時そうで

35）前掲『友人の手紙』、142頁。

あったように、熱心に診察を始めている」。[36]

その住宅は、1943年11月23日、アメリカ軍の激しい空爆によって破壊された。壁だけはまだ残っており、バルコニーが哀れな格好で空中にぶらぶら垂れ下がっていた。他は瓦礫の山となって噴煙が立ち込めていた。住人たちは爆撃が始まる前に避難していた。「そうです。— 空爆があったとの報に接して、当初、ひどく衝撃を受けました」。疎開先のノルトハウゼンからケーテ・コルヴィッツは、ベルリンにいる息子に宛てた手紙でこう記した。「そこは私にとって、50年以上にも及ぶ心の古里、故郷（Heimat）でした。あの住宅から５人が、そうです、愛すべき５名の人々が永遠に旅立ちました。すべての部屋が思い出に満ち溢れていました」。[37] ケーテが嘆き悲しんだのは、そこから旅立った死者たちに対してであり、彼らにまつわるその思い出に対してであった。決して物体としての家屋に対してではなかった。物質的な財産というものは、コルヴィッツ家の価値観にとって何ら大きな意味を持つものではなかったのである。

コルヴィッツ一家の住んでいた家屋は簡素な造りをしていて、家族はつましく暮らしていた。— それはケーテの母方のルップ家から受け継いだかつてのプロイセン的プロテスタント的な遺風に由来する。浪費や贅沢な暮しとは無縁で、きわめて節制された生き方であった。しかし、一家は、心地好い安心できる生活を送っていた。家政婦を雇い、家族旅行を楽しみ、十分な栄養を摂ることができた。また、劇場に出かけることや新刊書を購入することに倹約することはなかった。息子を外国の大学で学ばせることができたということは、コルヴィッツ家が、つましい生活を旨としているとはいっても、そうした学費を捻出することは可能であり、また、そういう点でお金を惜しむことはなかったということを物語っている。もっとも、逆の見方もできる。当時の若者が、リュックを背負い、徒歩で放浪の旅を続け、簡素な宿屋に転がり込んでいた頃、息子たちは列車の４等で旅行した。また、ハンスが舞踏会から朝帰りする際に辻馬車を利用したことなど、問題がないわけではなかった。それが今世紀初頭の教養ある市民層の生き方であり、— ケーテの家族にはボ

36）ヘレーネ・ブロッホ宛てのケーテ・コルヴィッツの手紙、1939年１月16日付け、未公刊（ベルリン芸術アカデミーのケーテ・コルヴィッツ文庫所蔵）。
37）前掲『息子への手紙』、225頁以下参照。

ヘミアン風な行動様式はなかった。

ケーテの収入が通常に比べて良かった年においてさえ、それだけではカールが健康保険医としての使命を果たすための資金としてまだ十分ではなかったということが、ケーテ・コルヴィッツの心に重くのしかかっていた。1912年、マックス・リーバーマン（Max Liebermann）が描いた油絵の自画像には12 000マルクの値がつき、彼の「モンテピンキオの競馬」（Korso auf dem Monte Pincio）に対しては30 000マルクといったびっくりするような価格が設定され、また、スレフォークトの自画像（Slevogt-Selbstporträt）が10 000マルクという値段であった。さらには、28歳のマックス・ベックマン（Max Beckmann）の絵でさえ、彼の描いた「社会」（Gesellschaft）には4 500マルクの値札が付けられた。そうした当時の状況のなかで、他方、1911年、ケーテ・コルヴィッツのサイン入りの上質の版画が、一葉30マルクを越えることはなかった。[38] 1913年のケーテの総収入は、3 407マルクであった。その頃の彼女はすでに女流芸術家として、版画部門において、とりわけ銅版画によって、相応の地位と名声を保っていたのである。作品目録も刊行されており、彼女の版画は美術館や個人の収集家に購入されていた。しかし、ケーテが — たとえば、カッシーラ画廊で開催されたケーテの生誕50年記念特別展における収益がそうであったように — いかに「多くのお金」（viel Geld）を思いがけず手にすることができたと嬉しく感じたとしても、それは［当時の一般的基準に拠るのではなく - 訳注］彼女の慎み深い基準に照らしてのみ大金に思われたのであった。

そうした事情から、ケーテは、依頼された作品に取り組むことによって生計を維持していかなければならなかった。本の装丁、ビラやちらし、ポスターなど — それらの作品にしっかりと向き合い正当に評価するならば、そうした注文を受けた作品であっても、その道徳的価値や心に迫ってくる強い力は少しも劣っていないことがわかる。1928年、ケーテがプロイセン芸術アカデミーの評議会で版画マイスター・アトリエの室長に任用され、それに伴ってアカデミーの評議員に迎え入れられたその年からやっと、ケーテ・コルヴィッツの経済的状況も良くなってきた。— 特別

38）ヴェルナー・ドーデ『ベルリン分離派、世紀の変わり目から第一次世界大戦までドイツ芸術の中心地ベルリン』、ベルリン1977年、構図 E。

手当や助成金などすべてを含めた彼女の俸給は、月額812,84RM（ライヒスマルク）と定められた。[39]

しかし、1933年［ヒトラー内閣が成立し、ナチ党による一党独裁体制が敷かれた年 - 訳注］以降、困難な状況が生じてきた。カール・コルヴィッツが一時的に健康保険医としての免許を取り上げられたので、診察によって得られる収入が急激に減っていった。それと同時に、コルヴィッツの版画もほとんど売れなくなってしまったのである。美術館でコルヴィッツの作品を購入することに対しては、禁止命令が出されていた。また、コルヴィッツ作品を個人的に収集している著名なひとには、とりわけユダヤ人が多かった。彼らは、当初からコルヴィッツの作品に共感し、感謝の念を抱いていた。彼らに対し、今やこれまでにない差し迫った不安が襲ってきたのである。医師としての収入によって家族が暮らしていく生活基盤を何十年にもわたって築いていたカール・コルヴィッツにとって、経済的な不安は耐えがたいことであった。「私たち家族はこれからずっと金欠病（Geldchen）に罹って暮らしていくしかないのではないかという観念が夫を絶えず苦しめています」。ケーテ・コルヴィッツは友人のイェープにこぼしている。「実際また、財布の底を覗き見なければならない生活、かといって作品を売ることも完全に遮断されていることによる窮乏生活を、彼は深刻に受け止めているように思います」。[40] ケーテ自身は、そうした事態を比較的冷静な気持ちで見ていた。「私は今あるお金でやりくりできないとは思っておりません。…私たちがどうにか間に合っているあいだは、ちゃんとやっていけるのですから。実際、そのことは確かなことです」。[41]

しかし、当時、人々は束縛された日々の生活を送らざるを得なかった。1936年、或るソヴィエトのジャーナリストが、彼女が苦境に陥り惨めに暮らしているという記事を、『イズヴェスチア』（Iswestija）に掲載した。それに対し、ケーテ・コルヴィッツは不快に思い、その記事をはねつけた。しかし、ケーテが1922年から取りかかっている仕事、つまり、母親がふたりの子供を腕に抱えた大きな石像を完成さ

39）ハインツ・リューデケ『ケーテ・コルヴィッツとアカデミー、1967年生誕100周年、ベルリンにおけるドイツ芸術アカデミー』、ベルリン（ドイツ民主共和国）1967年。
40）前掲『ケーテ・コルヴィッツとの60年にわたる友情』、260頁。
41）前掲『息子への手紙』、217頁以下参照。

せるための費用を捻出できないということが、彼女には辛かった。が、国家の監視のもとで芸術に対する差別や妨害がなされているにもかかわらず、きちんと仕事を継続できる証明として最後の大きなこの彫刻の仕事を世間に提示する、という希望がまだ彼女を支えていた。振り返ってみると、この仕事を起点に彼女のすべての彫刻作品は、新たな展開をみたように思われる。彼女の高潔な仲間であるレオ・フォン・ケーニヒ（Leo von König）の莫大な援助のおかげで、ついにケーテは或る彫刻家、石工に仕事を依頼することができた。しかし、彼女の「群像」（die Gruppe）を展示することは許されなかった。「やれやれ、或るドイツ婦人よ、そうは問屋がおろさないぞ」。『フェルキシェ・ベオーバハター』（Völkischer Beobachter, ナチ党の機関紙 - 訳注）は、1933年、すでに国立美術館の新規則を制定するさい、コルヴィッツのその母親像についてこう記していた。

人物像と思い出

幼い頃のケーテ・シュミットを私たちは、どこか憂鬱そうな表情でカメラを見つめている一枚の写真によって知っている。ブルネットの髪をしたきゃしゃで生真面目な子供である。その写真は、寝ている間の悪夢や何故ずっと機嫌が悪いのかということを記憶をたどりながら説明しているところのようにも見える。それから数年経った後の家族写真では、型にはまった表情が個性を覆い隠している。写真では、少女ケーテは、姉妹のユーリエとリーゼと間違えるほどよく似ている。20歳のときの自画像のなかで初めて個性が発揮されている。聡明で開放的かつおおらかな性格と同時に強情なところもあって、いずれにせよ自意識がはっきりしている像である。この若き女性は、将来自分が何になりたいかをはっきり自覚している。彼女は真摯に自己を見つめ、美しく見せかけたりすることなく、また先入観にとらわれることもない。彼女の場合、自己陶酔的なところはまったくみられない。大勢の若い男の子たちと一緒に舞踏会のホールを突き進んで行かざるを得ない時、顔を赤らめてしまうケーニヒスベルクの裕福な市民層の内気なお嬢さん達とは、あらゆる点で異なった道を歩んだ。というのも、彼女は自らを見栄えのしない不細工な容姿をしており、— その点で、妹のリーゼと比べて見劣りすると感じていたからである。リーゼは魅力的でぴちぴちした、かつ陽気な性格の女の子であっ

た。[42] 40歳になってケーテは、私たちが日記の冒頭で彼女を知るように、自分がどういう人物であるかを知る。彼女の振舞い、服装、髪型、それらはすべて彼女の飾り気のない率直な人柄がそうさせるのであり、決して型にはまった陳腐な考え方からではない。ケーテは、彼女の世代の通例に反して、スポーツ好きな女性であった。徒歩旅行を試み、そりで滑走することもあった。彼女はスケートに夢中になっていて、また、登山を好んだ。彼女は優美であり、昔からの細くて薄い髪がすでに白髪になって長い年月が経って後も、ブルネットの頃と同様、周りの人々に強い印象を残す女性であった。重い瞼の下の目は大きくて、温かい感じのする褐色の瞳は、依然としてどこか憂鬱そうに映る。口は大きい。彼女の声は、のどの奥から発せられる低音であったが、そのアルトの響きで話す際、舌がもつれていた。— 同時代の多くの証言によれば、言語障害と呼んでよいほどの状態であった、という。ケーテは、日頃めったに口を開かなかった。彼女は心からそう感じたことだけを語るのであった。

口が重いのとは逆に、ケーテは、良き聞き手であった。彼女の耳を傾ける姿勢は周りの人々に信頼感を与えた。その姿勢は、へりくだった態度や知ったかぶりをするというのではなかった。彼女は、話し手に良き助言を与えた。「微妙な問題がそこに含まれているとしても、置かれた状況を正当かつ公平に評価し、すべてを共有し共に体験しようとする姿勢がそこにはあった」。女友達のイェープはこのように要約して述べている。[43] また、妹のリーゼ・シュテルンは次のように証言している。「ケーテは確かに聞き方が見事であった。聞くだけできちんと、正しく状況に反応した」。[44] ひとが話をするさい、ケーテの目は真剣な輝きを放ち、注意深く話し手の方へ向けられた。1941年、レオ・フォン・ケーニヒ（Leo von König）は、そのようにケーテの人物像を描写した。

若い頃、ケーテは周りの人々の話題に上る女性であった。それは「大きく口を開いて健康的な歯をみせながら笑う姿、…パーティーを楽しい雰囲気で盛り上げ、堂々と扮装するその資質に因っていた」。[45] リーゼ・シュテルンはこう述べている。そ

42）前掲『友人の手紙』、133頁。
43）前掲『ケーテ・コルヴィッツとの60年にわたる友情』、35頁。
44）前掲『友人の手紙』、142頁。
45）同書、143頁。

してまた、ケーテの人物像について、こうした私たちの予期せぬ一面をはっきり述べているのは、何もケーテの妹リーゼに限るわけではない。1966年にハンス・コルヴィッツによって刊行された『友人の手紙』には、人生を陽気に楽しむケーテのこうした一面にかんする多くの証言が含まれている。ケーテは、奇抜奇天烈な扮装で、たとえば情熱的な踊り子の姿や、感傷的な民謡や学生歌をバッコス風に酔狂で演奏するといった格好で仮装舞踏会に現れた、という。家族で大きな祝い事があった場合にも、ケーテは、その中心人物として雰囲気を盛り上げ、華やかに活気づける本領を発揮した。家族の中でも、ケーテとカールが一番楽しく振舞っていた。基本的に人生を楽しもうというケーテの考え方は、彼女の日記の中にも多々感じとることができる。おそらく、実際の場面でおのずと楽しんでしまうというよりはむしろ、回顧的に、あとから振り返って楽しんでいる風である。「私の人生において、情熱や精気、苦悩や歓喜といった感情がなんと激しいことだろうか」。50歳のケーテは、こう回想している（1918年７月１日）。「当時、私は、太陽のもとで格闘していた。>大地の息子<」。

しかしながら、人生の後半に体験した衝撃を切り抜ける力を、彼女はもはや持つことができず、集中力は彼女の心の中で屈折し、影を投げかけた。が、それでも、年老いていくなかでなお存在することの喜びを肌で感じていた。― 自然と旅行が老いてなお保たれている彼女の魅力の源であった。若くて美しい人々は、これまでと同様、彼女を魅了し、画家としての彼女の目を大いに喜ばせた。リヒテンラーダーに行った頃（die Lichtenrader Kapitel）、祖母は、喜びに満ち溢れていた。［ケーテは1933年７月、ハンスの家族と一緒にバルト海近郊のリヒテンラーダーに旅行に出かけている。ユッタが10歳の頃である。当時の日記にケーテは、ハンスの妻オッティリー Ottilie のことをもっとも愛すべき美しい母親の顔をしている、と記している。- 訳注］。創作する過程で中断することがますます長くなっていったのは事実である。が、それでも65歳になってなお、「ほかの何ものとも比べることができない幸福感。仕事をすることの喜び、それによってひとは成長していく」（1932年復活祭）ということを心得ていた。

晩年に至っても、ケーテの人格あるいは人間性は、さらに強い印象を周りの人々に与えたのであった。「一言の言葉も交わすことなく、現前にある姿だけでそのよ

うな感銘を与える人間に、私はこれまで一度も出会ったことがない」。[46] 1947年、画家のヴェルナー・ヘールト（Werner Held）はケーテのもっている魅力を不思議に感じ、こう表現した。また、国際連盟に賛同する会議（die Liga）がベルリンで開かれた際、そこで行われた講演に参加した或る人物は、それから30年経ってなお、以下のようなその場の雰囲気を覚えていた。「ケーテは会場の中央に設けられた彼女の座席に静かに座していただけであったにもかかわらず、きわめて不思議なことに、彼女は一瞬にして会場全体の注目の的になった。会場にいた人々が、彼女の持つ何ともいえぬ魅力に引き付けられ、彼女の周りに輪になって集まって来た。講演者もまた、こうした状況にあって皆と同じ感情を持ったに違いなかった。というのも、私は後にその講演者から聞いたのであるが、彼の言説は、まさに彼女に向けて発せられていたのであり、彼にしてみれば、ケーテ・コルヴィッツを除いて、そこに集まった参加者は…誰もいないも同然であった」。[47]

私たちはケーテに関するこの種の表現を、数多く聞くことができる。ここでは、そうした類から離れて、きわめて個人的な事柄を付け加えることにする。

私は、私の祖母ケーテ・コルヴィッツという人物をよく知っている。初めの頃は孫の視点から知っていた。私たちがリヒテンラーデ（Lichtenrade）に住んでいた頃の日曜日の午後、森の中でボッチャで遊んだり（Bocciaspiel）、「木から木へ移る間につかまえる遊戯」（Verwechsel das Bäumelein）をしたこと、あるいはまた、ヴァイセンブルガー通りの家でお祝の日々を共に過ごしたこと。ベルリンの古い賃貸アパートのあの階段は、まごうことなく臭気が漂っていて、どこかかび臭かったのを覚えているが、私たち子供にとっては、ちょっとした異国情緒の魅力があった。４階には長円形の白いドアの表札がかかっていて、真っ白なエプロンをしたリーナおばさん（Lina）［コルヴィッツ家の家政婦、40年余にわたってケーテの二人の子供の育児や家事全般を引き受けていた。「コルヴィッツ家の人びとにとって家族同様の人であった」志真斗美恵。- 訳注］がドアを開けて迎えてくれた。彼女は、時代がどんなに変わってもそれに何ら影響されずに（zeitlos）、穏やかにケーテ一

46）同書、184頁。
47）同書、164頁。

家の家事をみていた。子供の私たちは、４階のその薄暗いひっそりとした部屋に入ると、いつも何かびくびくしたものだった。しばらくすると、祖母のケーテが奥のドアから顔を出し、笑いながら両手を広げて現れたものだった。私たちは彼女を愛していた。同じように祖父もまた、彼女が私たち子供の生活に密接に関わり合うことは欠かせないことである、と感じていた。つまり、彼女のもっている誠実さや思いやり、深刻な口調に対する快活さ、子供が引き起こす諸問題に対する彼女の意見や同意は必要なことである、と感じていた。私たち子供にとっても、いつも幾分きちょうめんで憂鬱な彼女の雰囲気は、祖母の家になくてはならないものであった。たとえば、クリスマスには、私たちがキスした後、彼女は涙に濡れ、年とった柔らかな頬を寄せてキスを返し ― その際、私たちは常に聞かされたのであるが ― 彼女の大好きな詩句の一節を唱えていた。それは、コンラート・フェルディナント・マイヤー（Conrad Ferdinand Meyer）の一節で、「平和、地球の平和」であった。

幼少期を過ぎ、成長するにつれて、しだいにケーテに会うことは稀になっていった。私は年間を通してベルリンにいることはほとんどなかった。が、休暇で家に帰ることがあれば、いつも決まって私が最初に訪問したのはヴァイセンブルガー通りにある祖母の家であった。ときには彼女がみずから住宅のドアを開けた。彼女は小さくなっており、腰をかがめ、たいへん弱々しげな様子になっていた。彼女は暗闇の中で倒れ込み腕を折って以来、その腕を一本の支柱で支えていた。しかし、決しておしつけがましくない雰囲気の中、控え目で且つ高貴な威厳さが漂っていた。「流刑地の女王」（Eine Königin im Exil）、そう感じ、私は日記にその言葉を書き記した。が、彼女が肘掛椅子に座るとすぐに、この印象は消えていった。彼女は、いつも話題に事欠かなかった。あらゆる出来事に注意を向け、目配りが確かで配慮が行き届いていた。諸々の事を、温かな茶色の目、どこか潤んだような忘れられない目でもって語るのであった。

そして、ついに残された最後の半年を、ケーテはモーリッツブルク（Moritzburg）で過ごした。その地で私は彼女の世話をした。私は、彼女の世話をするために戦争への学徒動員を免除された。そして彼女の傍らで、ともに過ごすことのできることを非常に楽しみにしていた。が、すぐにそれがほとんど耐えることが出来ないほど困難なことだとわかった。人々からたいへん尊敬され崇拝された人物が、見るから

に衰弱しており、行動も緩慢で物忘れもひどく、ひとりではどうすることもできない状態になっていた。— 要するに、年老いたのである。死（Tod und Sterben）に関し、長時間にわたって毎日繰り返される話も、私が欲するような内容ではなかった。当時、私は21歳であり、生きることに希望をもっていた。しかし、その後、私たちは、私が毎晩ゲーテの『詩と真実』の一節を彼女に読んで聞かせるということで意見が一致した。それは、私たち二人にとって有意義なことであった。私の張りつめた感情やいらいらした精神状態は和らいでいき、彼女もそうした感情の変化を察知し、感謝の念を抱くようになった。私たちは、世界や戦争また生命について、長時間にわたって語り合った。そして、そうした触れ合いができた後は、たとえ彼女の熟知したゲーテの一句、たとえば、オッティーリエ（Ottilie）は言った、「来たまえ、そして我々に死について語りたまえ」といった句を引き合いに出した場合であっても、私は、落ち着いてそうした表現を受け入れることができた。

1945年４月、ケーテは死んだ。横向きになった姿で、両手は重ね合わされて胸の前に置かれた。— 小さな年老いた婦人であった。いっぱいに溢れた白と赤のたいへん美しいモクレンに回りを囲まれながら安置された彼女は、モーリッツブルクの墓地に埋葬された。

ケーテの伝記を書くことを私は決心した。彼女が亡くなって１年後の1946年、さっそく私は、大学へ提出する再入学許可の申請用紙に、私の「主要な人生設計」としてこう書き記した。「個人的な敬愛の念からいっても、また客観的な芸術的評価という点からいっても、この偉大で稀有な女性を正当に評価すること」。

しかしながら、まだその仕事は完成していない。伝記を書くという決心をしてからすでに40年以上経過したが、今やっと、私は、コルヴィッツに関する一冊の著書（ein Kollwitz-Buch）を公刊することができた。— それは伝記ではなく編集した書物であり、彼女の生涯の記録であり報告である。しかも、私の言葉によって記されたものではなく、彼女自身の言葉によるものである。この著は、彼女の伝記を書くという私の決心したものとは異なる。— が、それでもやはり、きわめて意義深いものである。理由はこうである。それは彼女が残した芸術作品についてもいえることではあるが、彼女自身以上のケーテ・コルヴィッツというのは実はどこにもいないのである。そしてまた、この『日記』で示された記録文書以上に、生き生きと

私たちに向き合う彼女はどこにも存在しないのだから。

ケルン、1988年10月

ユッタ・ボーンケ（Jutta Bohnke）